

## 2 私を育てたあの時代、あの出会い

生徒の心に働き掛ける指導が、教育の原点であることを知った  
徳島県立徳島科学技術高校◎阿部憲市

## 4 特集

## 「主体性」の育成①

「分かる」授業の追求で  
学びの「主体性」を引き出す

6 現状整理 学校教育において急速に進展する「デジタル化」という環境変化

8 対談 デジタル機器を活用し、生徒が自ら考える場面をつくる  
東北学院大大学院准教授◎稲垣 忠・岩手県立軽米高校◎川村俊彦

12 学校事例 広島県立甘日市高校  
協同的な学びとデジタル機器を用い、生徒の主体性を引き出す学びを実現

18 小・中学校の取り組み 山形県寒河江市立高松小学校、佐賀県立致遠館中学・高校  
デジタル機器の利活用が、子どもの学びの可能性を広げる

## 22 指導変革の軌跡

22 岩手県立盛岡第三高校  
教科指導改革◎知識偏重から脱却し、考えさせる授業で真の学力を育てる

26 埼玉県・私立西武学園文理中学・高校  
進路指導◎生徒を個々に把握し教師全員で生徒を支え、前向きな進路を促す

## 30 30代教師の「転んでも起きる!」

全員の興味を引き出すために、生徒の実態に応じた指導を追究  
福岡県・私立大牟田中学・高校◎園田直嗣

## 32 生きたデータの徹底活用

学び続ける集団をつくる1年生2学期の定期テストデザイン

## 36 未来をつくる大学の研究室

AIDSの発症を防ぐ抗ウイルス剤の新薬を開発  
熊本大大学院 生命科学研究部 血液内科・膠原病内科・感染免疫診療部 満屋裕明研究室

## 40 新課程のファースト・ステップ

言語活動の充実を、授業の中でどのように取り入れるか  
三重県立神戸高校

## 44 VIEW'S REPORT — 地方公立高校の挑戦

テーマ 再編・統合からの学校づくり  
教師と生徒が当たり前を徹底した時、2つの高校から「特別な高校」が生まれた  
遅刻数ゼロへ—鳥取県立倉吉総合産業高校「学校再編からの挑戦」

## 52 大学選択 新たな視点

大学での学びへの意欲とスキルを育成する初年次教育〈東日本編〉

## 58 VIEW'S SQUARE

\*本文中のプロフィールは  
すべて取材時のものです。  
また、敬称略とさせていただきます  
\*本誌記載の記事、写真の無断複写、  
複製および転載を禁じます

今、振り返る教師としての原点

## 私を育てた あの時代、あの出会い

徳島県立徳島科学技術高校

阿部憲市

# 生徒の心に働き掛ける指導が 教育の原点であることを知った

教科の指導技術が高ければ、生徒を成長させることが出来る——そう考えて  
気負っていた若い自分を変えた一人の先輩との出会い。その背中を追い掛けて  
必死で模倣し、自分の血肉としていった日々を、阿部憲市先生が振り返る。

## 赴任早々に味わった挫折感



この学校で実績を出せなければ一流の教師にはなれない

かもしれない——7年目に赴任した徳島県立城北高校が県下屈指の進学校だったため、私は相対のプレッシャーを感じていました。その頃の私が目指していた「一流」とは、担当教科の数学で生徒をぐいぐい引っ張る教師。教科の指導技術さえ高ければ、生徒を成長させることが出来るかと考えていたのです。

そうした私の教師観を根本から変えてくださったのが、当時進学課長だった村田和生先生です。赴任前、前任校の同僚から

「城北高校には教科指導も進路指導も生活指導も出来るすごい先生がいる」と、村田先生のことは聞いていました。その第一印象は「怖い」の一言。威厳があり、気軽に話し掛けられる雰囲気ではありませんでした。

1年生の担任となった私は、すぐに挫折感を味わいました。城北高校の数学は進度が速く、その日の授業ですべきことが時間内に終わらないのです。また、担任として学力を低迷させたくないという思いから、「勉強しなさい」と連呼していましたが、生徒の心には届かず、クラスはまとまりを欠いていました。当初の私の意気込みは空回りしていたのです。

私のそんな悩みを見透かして

いたのか、ある冬の日、私は村田先生から「〇日、時間を空けておけ。飲みに行くぞ」と声を掛けられました。日々の指導が思うように出来ていなかった私は、逃げ出したい思いでしたが、まさか嫌とは言えません。

当日は、ライバル校の進学課長と学年主任の先生がいて、城北高校の教師は村田先生と私だけでした。どうして私が呼ばれたのかと不思議でなりませんでしたが、後になって「お前に期待していたから」と言ってくださり、心からありがたく思いました。その席では、重鎮に囲まれた緊張から、私は貝のように口を閉ざしていましたが、先生方の教育談義を通して深い見識や指導の在り方を学びました。

## 生徒の心に働き掛けるために

これを機に徐々に村田先生から指導していただくようになりました。先生から繰り返し伝えられたのが「生徒の心に働き掛ける」という言葉です。当時の私は教科指導ばかりに目が向いていました。しかし、まず教師が生徒と心を通わせなければ、生徒を成長させることは出来ないというのが村田先生の考えでした。そのためには、何より面談が大切と教えられました。

私は村田先生の面談の方法が気になり、進路室で仕事をする振りをして、村田先生の面談を拝見しました。その方法は独特で、1人5分か10分で話は終わり、それを全員に毎月行うので

## 先輩教師の言葉

### 教師に志がなければ 生徒に高い志を 持たせられない

徳島県立富岡西高校校長  
村田和生



赴任当初の阿部先生のこととはよく覚えていますが、元

気があって何事にも一生懸命な若手が来たなど思いました。ただ厳しい言い方ですが、我々はプロですから、基本的な指導は出来て当たり前。私は滅多なことでは褒めませんから、厳しい先輩だと思われていたのは当然でしょう。

私が若い先生方に厳しく接するのは、高い志を持つてほしいからです。教師に志がなければ、いくら生徒に「志を持って」と言っても空言にしかなりません。阿部先生にはよく「県下ナンバー1のクラスをつくれ」と発破を掛けていましたが、それくらいの意気込みがなければ、教師も生徒も成長しないのです。

左 むらた・かずお 理科。新野高校、城北高校などを経て、日和佐高校(2006年3月閉校)、城ノ内高校で教頭を務める。08年度より徳島中央高校校長、10年度より富岡西高校校長。

撮影○城北高校にて

右 あべ・けんいち 数学科。富岡西高校、城北高校などを経て、現在は徳島科学技術高校に勤務。2012年度より進路指導主事、進学課長。



す。早速、それをまねてみると、生徒との距離が徐々に縮まっていきました。面談を重ねることで生徒の学力や心境の変化を細かく把握できるようになり、的確な助言を行えるようになったからです。また、生徒が家庭で面談の内容を話すことで、保護者との信頼関係も深まりました。

村田先生は「感動」という言葉もよく使われました。担任の頃は、「学校行事での感動が大きいほど、受験への切り替えもうまくいく」を持論に、学校行事の賞を総なめにするようなクラスをつくったそうです。私も学校行事に一生懸命になれるクラスづくりを心掛けました。すると、本当に進学実績が向上したのです。「受験は団体戦」という言葉の意味を噛み締めながら、教科指導だけで生徒を伸ば

そうとした自分の考えの浅はかさと思い知りました。村田先生から学んだ生徒の心に働きかける指導は、その後の私の教師人生を決定付けるものでした。現在の勤務校と当時の城北高校とは生徒の状況は異なりますが、生徒一人ひとりの心に迫り、自ら学ぼうという気持ちを引き出す指導の大切さは全く同じです。担任を務めていた昨年

度までは、やはり毎月の面談を欠かしていませんでした。進学課長になった今年度は、教師の結束力で生徒を育てることが課題です。困った時は「村田先生ならどうするか」と考えます。最近、ついに口癖まで似てきたような気がします。村田先生から受け継いだ教えをいかに次の世代に引き継ぐか、それが私の当面のテーマです。

阿部先生はその思いをしつかりと受け止めて、私の話を素直に聞くだけでなく、それを実際にまねていました。教師にとって先輩教師の良いところをまねすることはとても大切で、初めから下手に自分を貫こうとしてもうまくはいきません。ただし、まねで終わってしまうのもだめで、そこに少しづつ自らの個性を加味して、自分の血肉としていかなくはなりません。阿部先生にそれが出来たのは、常に向上心を持ち続けていたからでしょう。

私はたびたび「3掛け」が大事だとも話してきました。それは生徒に対する「目掛け・声掛け・手間掛け」です。特に近年はパソコンの普及などにより、手間を省く教師が増えたように感じます。しかし、調査書もパソコンで作るより手書きの方が内容が頭に入り、生徒の状況をしっかりと把握できます。時代が変化する中で、「3掛け」をいかに守っていくかが、生徒との心の距離を縮める鍵だと私は思っています。そうした教育を、阿部先生をはじめとした次世代のリーダーたちが若い世代に伝えてほしいというのが、私の願いです。

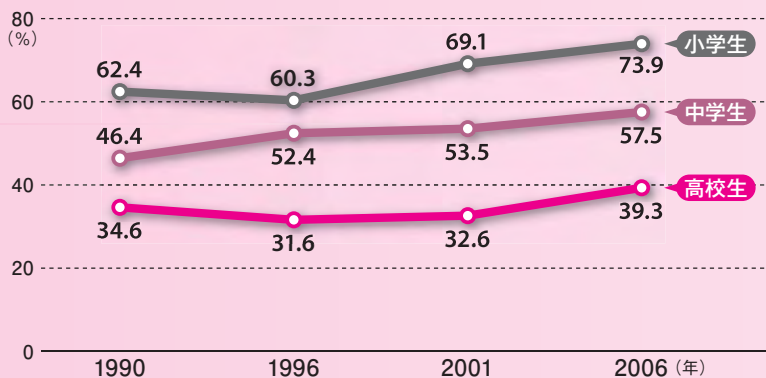
主体性の育成 ①

分かる授業の  
追求で  
学びの  
主体性を引き出す

社会の「デジタル化」の進展に伴い、学校現場においても、デジタル機器の導入・整備が進んでいる。デジタル機器をうまく活用すれば、授業の理解度を向上させ、生徒の学びの「主体性」を引き出すことが出来る。今号では、「主体性」を育む手段としてのデジタル機器の活用のポイントと可能性を考えていく。

授業の理解度 (小学生・中学生・高校生)

Q. 学校の授業をどのくらい理解していますか(わかっていますか) 算数・数学



\*「ほとんどわかっている」+「70%くらいわかっている」の%  
\*小学生は算数、中学生・高校生は数学である  
出典／ Benesse 教育研究開発センター「第4回学習基本調査・国内調査 速報版」

学校段階が上がるにつれて、授業の理解度は下がっている。  
高校ではまず、**授業の理解度を高めることが重要になる。**

8月号で見てきた、社会の環境変化に立ち向かうために必要なこと  
**「主体性」の育成**

本号のテーマ

「主体性」を育む手段として、生徒の学びと教師の指導に  
 デジタル機器をどのように取り入れればよいのか

デジタル機器活用による可能性

1. 指導の質の向上

「デジタル機器を活用し指導を効率化・充実化できれば、  
 行事や部活動を減らさずに学力向上が図れるのではないか」



岩手県立軽米高校 川村俊彦先生 ▶対談 P.8

- ◎動画やプレゼンテーションソフトのアニメーション機能などを使うと学習内容がイメージしやすくなり、生徒の理解を促進できる
- ◎電子黒板や書画カメラなどの活用によって指導の一部を効率化でき、浮いた時間を、生徒が考える時間や学び合い、教師が生徒にかかわる時間に充てられる

広島県立廿日市高校 ▶学校事例 P.12

2. 学びの質の向上

「自分に必要な情報を探し、自分で解決するという  
 学習の枠組みを作ることに、デジタル機器は有用」



東北学院大大学院 稲垣忠准教授 ▶対談 P.8

- ◎考えを共有しやすくなったことで、子どもの「表現したい」という意欲が高まる
- ◎インターネットによる調べ学習で、知的好奇心が刺激され、視野が広がる
- ◎保存・再生に優れたデジタル機器の活用で繰り返し学習がしやすくなり、学習内容の定着を図りやすくなる

山形県寒河江市立高松小学校、佐賀県立致遠館中学・高校 ▶小・中学校の取り組み P.18

生徒自らが学びに向かおうとする

社会環境変化の中での「主体性」の育成を、4号連続で取り上げます

8月号  
 環境変化に立ち向かう  
 「主体性」を育む

10月号  
 本号

12月号  
 グローバル化と  
 「主体性」の育成①

2月号  
 グローバル化と  
 「主体性」の育成②

# 現状整理

日本の教育にデジタル機器が活用され始めたのは、今から40年以上前の1970年代。驚くことに、コンピュータを活用した、生徒の個別のアセスメントと課題提供が、一部の学校で既に試みられていた。ただし、コンピュータが本格的に学校に導入され始めるのは、80年代後半になってからである。

80年代後半には、ハード面だけでなく、デジタル機器を用いた教育の在り方について本格的な議論も始まり、臨時教育審議会で「情報活用能力」という言葉が初めて示された。そして、88年度に告示された学習指導要領では、数学や理科におけるコンピュータの活用場面が具体的に示され、中学の技術・家庭科では「情報基礎」が新しい領域として設置さ

# 学校教育において急速に進展する「デジタル化」という環境変化

1970年代にパソコンが登場し、90年代にインターネットや携帯電話が普及してから、社会環境は一変した。その変化は学校教育に、どのような影響をもたらしてきたのだろうか。

図1 社会と教育のデジタル化の歴史

年度	デジタル化に関する社会・教育の主な動き	デジタル技術・製品の状況
1974		・マイコン (Altair8800) 登場
1977	・学習指導要領告示	
1978		・日本語ワープロ (JW-10) 登場
1979		・8ビットパソコン (PC8001) 登場
1982		・16ビットパソコン (PC9801) 登場
1983		・GUI パソコン (Macintosh) 登場
1984	・臨時教育審議会設置	
1985	・学校教育設備整備費等補助金 (教育方法開発特別設備) 創設 ・臨時教育審議会第一次答申	・アスキーネット・パソコン通信開始
1986	・臨時教育審議会第二次答申	・PC-VAN・パソコン通信開始
1987	・臨時教育審議会第三次答申、第四次答申	・NIFTY-Serve・パソコン通信開始
1988	・学習指導要領告示 → 中学の技術・家庭科に「情報基礎」の領域を新設	
1989		・ノートパソコン (Dyna Book) 登場
1990	・教育用コンピュータ整備費補助 (国庫補助5か年計画) 創設 ・「情報教育に関する手引」刊行	・DOS/V 機登場
1991		・超小型携帯電話 (ムーバ) 登場
1992		・Windows3.1 登場
1993	・総合経済対策でコンピュータ整備計画拡大	
1994	・教育用コンピュータ整備計画 (6か年計画)	・Web ブラウザ (Netscape) 登場 ・小型デジタルカメラ (QV-10) 登場
1995	・「高度情報通信社会に向けた基本方針」公表 ・「教育・学術・文化・スポーツ分野における情報化実施指針」公表	・Windows95 登場 ・低価格ターミナルアダプタ (MN 128) 登場 (ISDN が家庭に普及)
1997	・「体系的な情報教育の実施に向けて」公表	・Mac OS8 登場
1998	・「情報化の進展に対応した教育環境の実現に向けて」公表 ・学習指導要領告示 → 高校の教科に「情報」を新設	・Windows98 登場 ・i-mode サービス開始
1999	・バーチャル・エージェンシー「教育の情報化プロジェクト」発足 ・ミレニアム・プロジェクト「教育の情報化」発足	・ブロードバンド接続 (ADSL) サービス開始 ・Mac OS9 登場 ・カメラ付き携帯電話が登場
2000	・「e-Japan 戦略」決定、「e-Japan 重点計画」策定	・USB メモリが登場 ・Mac OS X 登場
2001	・教育情報ナショナルセンター (NICER) Web サイト開設	・Windows XP 登場 ・ブロードバンド接続 (FTTH) サービス開始
2002	・新「情報教育に関する手引」刊行 ・「IT で築く確かな学力」公表	
2003	・「e-Japan 戦略II」決定	
2004	・「e-Japan 重点計画-2004」策定	
2005	・教育の情報化の推進のための緊急メッセージ発表	
2006	・「重点計画-2006」が IT 戦略本部で決定 ・「初等中等教育の情報化に係る学習活動の具体的展開について」公表 ・「教員の ICT 活用指導力の基準 (チェックリスト)」策定	・Windows Vista 登場
2007	・先導的教育情報化推進プログラム推進	・iPhone 登場
2008	・「学力向上 ICT 活用指導ハンドブック」作成 ・学習指導要領告示 ・「学校の ICT 化のサポート体制の在り方について」公表	・Facebook、Twitter の日本語版のサービス開始
2009	・教員の ICT 活用指導力の実態調査の実施	・Windows 7 登場
2010	・「教育の情報化ビジョン」公表 ・学びのイノベーション事業、フューチャースクール推進事業の開始 ・「教育の情報化に関する手引」刊行	・iPad 登場 ・XPERIA X10 登場

\*日本教育工学会論文誌 Vol.32、No.3 (2008)「我が国における学力向上を目指した ICT 活用の系譜 (信州大教育学部 東原義訓教授) /「JAPET30年の歩み 設立30周年記念」(一般社団法人 日本教育工学振興会)を参考に編集部で作成

れた。

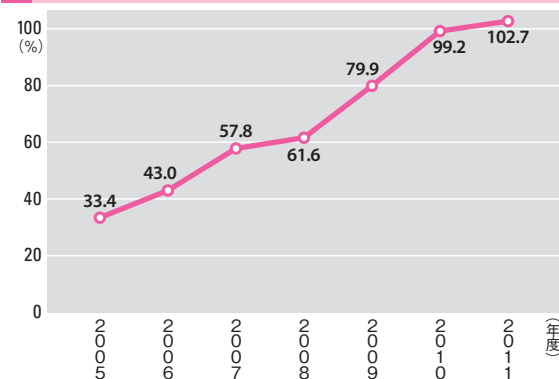
90年代に入ると、国や地方自治体の補助により、学校のデジタル機器の導入が加速。そして、95年にWindows 95<sup>®</sup> (\*) が登場したことで、インターネットが一般にも普及し、98年度に告示された学習指導要領では、デジタル機器および情報通信ネットワークが活用できるようになるための学習活動の充実が示された。高校においては、「情報」が新しい教科として設置されるなど、学校現場におけるデジタル機器・環境の整備の必要性がますます高まってきた。

2000年代に入り、教師の指導や生徒の学びを支援するデジタル機器は、プロジェクター、電子黒板、タブレットPCなど、充実・進化している。それは、図2で示した各種のデジタル機器の整備状況を見ても明らかだ。

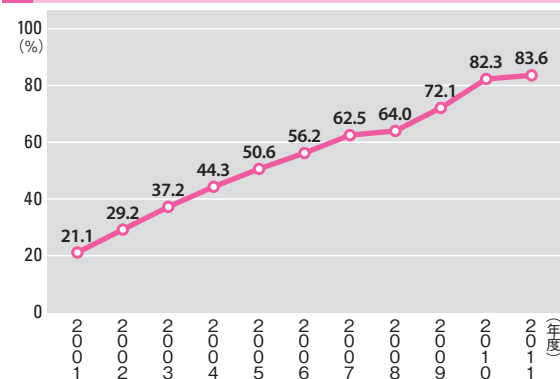
「デジタル化」という環境変化は、教育においても急速に進展している。そこで教師に求められるものは何か。次ページ以降で考えていく。

図2 小・中・高におけるデジタル機器の整備状況

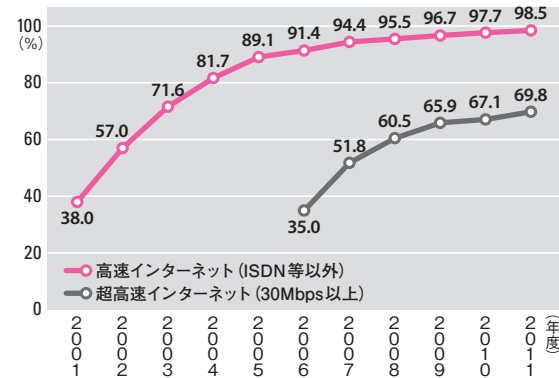
1 教員の校務用コンピュータ整備率



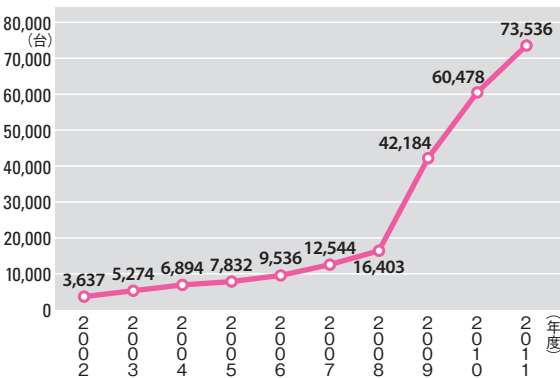
2 普通教室の校内LAN整備率



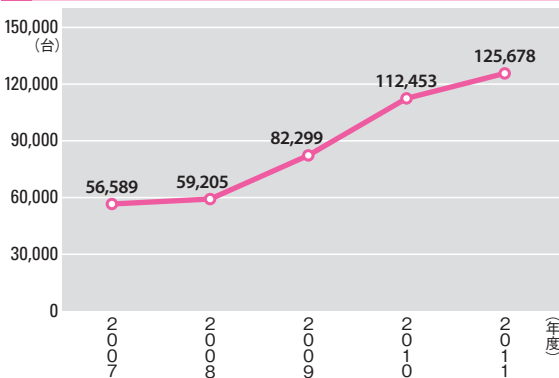
3 超高速インターネット接続率



4 電子黒板の整備状況



5 実物投影機の整備状況



\*調査対象は、全国の公立学校（小学校、中学校、高校、中等教育学校、及び特別支援学校）  
\*調査基準日は、2012年3月1日  
出典／文部科学省「平成23年度 学校における教育の情報化の実態等に関する調査結果 [速報値]」

\* Microsoft<sup>®</sup> が販売している OS シリーズの1つ。1995年秋に発売。

# デジタル機器を活用し 生徒が自ら考える場面をつくる

デジタル機器をどのように授業で活用すれば、生徒の学びが深まり、「主体性」を育てるのだろうか。小学・中学・高校とかわりながら、デジタル機器を活用した教育活動について研究する稲垣忠准教授と、デジタル機器を活用した授業を行っている岩手県立軽米高校の川村俊彦先生に話を聞いた。

**生徒の質の変化に  
指導を変える必然性を感じる**

川村先生は、担当する化学の授業で、PowerPoint®（\*1）のスライドショーの機能をよく使われると聞きました。指導にデジタル機器（\*2）を活用するようになった理由を教えてください。

川村 私は一昨年まで県内でも進学校といわれる高校に赴任していたのですが、ここ数年、生徒の数的処理能力がだんだん落ちてきているように感じていました。十年前の進学校の生徒であれば理解できていた問題を、最近の生徒は分からないと言っています。少子化の影響で、以前は進

学校に入れなかった層が入学してくるようになり、生徒の学力層が広がってきていることが原因でした。それまでも指導の工夫を重ねてきましたが、生徒

感じ、PowerPoint®を使った授業をするようになりました。——具体的にどのように指導に取り入れられているのでしょうか。

川村 私がよく使うのは、その日の課題の説明の場面です。例えば、入試には、過不足のある化学反応と量的関係の問題がよく出されます（図

の変化を目的の当たりにし、黒板とチョークだけの指導でよいのか疑問を抱くようになりまし

図1 川村先生の指導例

## 過不足のある化学反応と量的関係

1 アニメーションで1つずつ反応の量の関係を理解させる

CaCO<sub>3</sub> 1mol + 2HCl 2mol → CaCl<sub>2</sub> + H<sub>2</sub>O + CO<sub>2</sub> 1mol

HClははいくら入っているのかな?

HClはなくなった!

ビーカーに炭酸カルシウムを1個入れたら二酸化炭素が1個でき、4個目には出来なかったことをアニメーションで見せる

2 数値でも反応量を確認させる

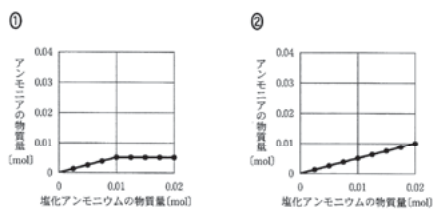
	1個目	2個目	3個目	4個目
CaCO <sub>3</sub> の質量	1.0g	2.0g	3.0g	4.0g
CaCO <sub>3</sub> の物質量	0.1mol	0.2mol	0.3mol	0.4mol
CO <sub>2</sub> の質量	4.4g	8.8g	13.2g	13.2g
CO <sub>2</sub> の物質量	0.1mol	0.2mol	0.3mol	0.3mol
反応したHClの物質量	0.2mol	0.4mol	0.6mol	

22.4L  
0.1 × 22.4L

1と同じアニメーションを使いながらも、数値に当てはめて説明し、化学の計算としてはどのように考えるのかを理解させる

センター試験では下記のように出題されている  
[2008年 本試験 化学I 第3問 問4b]

b 8本の試験管に水酸化カルシウムを0.010 molずつ入れた。次に、それぞれの試験管に0.0025 molから0.0200 molまで0.0025 molきざみの物質量の塩化アンモニウムを加えた。この8本の試験管を1本ずつ順に図1の発生装置の試験管と取りかえて加熱した。アンモニア発生反応が終了した後、発生したアンモニアの物質量をそれぞれ調べた。発生したアンモニアと加えた塩化アンモニウムの物質量の関係を示すグラフとして最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。  ⑤



\*川村先生の指導例の動画を、Benesse 教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。  
<http://benesse.jp/berd/> → HOME > 情報誌ライブラリ (高校向け)

東北学院大大学院 人間情報学研究科  
准教授

**稲垣 忠** いながき・ただし

関西大大学院総合情報学研究科博士課程後期課程修了。  
東北学院大教養学部講師、助教を経て、現職。小学・  
中学・高校現場にかかわりながら、情報教育、教育の情  
報化、学校間交流学習などを切り口に研究を展開。主著  
に「授業設計マニュアル―教師のためのインスタラクショ  
ナルデザイン」（北大路書房）など。



岩手県立軽米高校

**川村 俊彦** かわむら・としひこ

教職歴28年。同校に赴任して2年目。進路指導主事。岩  
手県立釜石南高校（現・釜石高校）、岩手県立金ヶ崎高校、  
岩手県立花巻北高校などを経て、現職。担当科目は化学。  
花巻北高校時代にデジタル機器を活用した授業を始め、  
現任教に赴任してから本格化させた。



1)。過不足なく反応する量を計算して答える問題なのですが、生徒は問題文やグラフの数値が何を意味しているのかを読み取れず、進学校でも正答できない生徒が多くいます。板書と言葉による説明だけでは理解させるのがなかなか難しかったので、スライドショーのアニメーションを利用することにしました。ピーカーと粒子のイラストで実験の様子をイメージさせ、「炭酸カルシウムを1個入れたら、二酸化炭素が1個できた。塩酸は2個必要だよ」と、反応の順序を一つひとつスライドを変え、数値で追い掛けさせながら説明しています。成績下位層の生徒も私の話についてきてくれ、そのように理解させた後、演習を行い、定着を図っています。

メッセージくらいようで、理解させるのに苦労していました。ところが、動きのあるアニメーションで視覚に訴えらると、伝わるものがあるようです。板書の内容をスライドにしたことで、授業で板書をする手間がなくなりましたし、板書で生徒を待たせることもなくなりました。スライドはテンポよく進められるので、説明中は生徒に鉛筆を持たせず、集中して聞かせられる利点もあります。

### デジタル機器で効率化するからこそ 人間的なかわりが増える

**稲垣** 板書の時間が省け、生徒の理解度も上がったことで、指導効率がよくなったのではないのでしょうか。

**川村** 学習には「分かる」「出来る」「活用する」のステップがあります。最初の「分かる」が成立しやすくなったことは大きな利点です。ここでつまずくと「出来る」に進めませんし、学習意欲も失われてしまいます。更に、「分かる」に掛ける時間が以前よりも短くなり、「出来る」ようになるための演習に時間を多く

掛けられるようになりました。

**稲垣** デジタル機器を使う第1の利点は、教師の指導効率が上がり、授業の構成が変わることにあります。分かりやすい説明によって、以前よりも生徒は早く理解できますし、説明が効率化されたことで説明に掛かる時間が短縮されます。浮いた時間を、演習問題に取り組んだり、隣同士で話し合ったりと、生徒が考える活動に充てることが出来るのです。

**川村** 授業用のノートとして、スライドと同じ内容の穴埋め式プリントを配り、説明後、生徒に空欄を埋めさせています。重要事項の空欄は、「先生になったつもりで説明するように書いてください」と伝え、私の説明を反すうさせます。この間、私は机間指導をしています。また、演習の時間が増えたことで、個別指導がしやすくなりました。

**稲垣** デジタル機器を使うことによって、授業が人間的ではなくなり、画一化するのではないかという声もあります。川村先生の場合、効率化した部分があるので、生徒との

\*1 Microsoft® が販売しているプレゼンテーションソフト

\*2 本誌で言う「デジタル機器」は、「ICT機器」とも表現される。なお、ICTとは情報通信技術の意味。

かわかりが密になったといえます。

**川村** デジタル機器を使うからこそ、人間的な部分が生きてくるのだと思います。以前は、板書中は生徒に背を向けていましたが、デジタル機器を使う今は、生徒の方を向いて話せるので、生徒の表情を見て「分かっているな」「もう一度説明しよう」などと理解度を確かめながら、スライドを止めたり進めたりして説明しています。また、演習の時、成績上位層にはプロジェクターに映した難易度の高い問題に取り組みさせておき、その間、下位層を集めて標準的な問題の考え方を説明することもあります。1つの教室で習熟度に応じた指導が出来ないか試行錯誤していました。そうしたこともデジタル機器を取り入れたからこそ出来るようになりました。

### デジタル機器を生かした授業はベテラン教師こそ可能

**稲垣** デジタル機器の活用によって人間的な部分が削がれてしまうとしたら、それは、指導の一部の効率化によって時間に余裕が出来たからという理由で、教える内容を増やして

しまうことにあります。生徒の理解度やつまずきどころを無視して、スライドを何十枚も作り、それを流して一方的に説明するだけでは、デジタル機器をいくら使ったところで、

生徒の理解は深まりません。結局は、授業の狙いを明確にし、生徒が理解できるように工夫する、すなわち、授業の構成をしっかり組み立てなければ、生徒の理解は深まらないのです。

**川村** 私も、スライドを作り始めた頃は見せ方に凝り、5色も使ってカラフルにしたり、スライドの数を多くしたりしましたが、かえって大事な部分が分からなくなってしまいました。授業をする度に改善を重ね、今ではスライドは5枚程、使う色は2、3色です。生徒の理解のステップを踏まえ、どこでつまずくのかを推測しながら説明の流れを考えて、プリントの空欄を埋める文字が出てくるようにしています。

**稲垣** 生徒の理解度をきちんと把握し、つまずきやすいポイントが分かっているベテランの先生だからこそ、細かいところにまで配慮の行き届いたスライドが作れるのだと思います。指導力がある先生にこそ、デ

ジタル機器を活用してほしいですね。

**川村** スライドを作るのは、文書作成用のソフトウエアを使ってプリントを作る手間とあまり変わりません。プリント作成の段階で授業の構成は出来ていますし、プリント用のファイルがありますから、それを基本的にコピーしていただくだけです。最初はソフトウエアの操作法が分からず手間取りましたが、一度作ればだいたい慣れますし、授業をして気になった点はすぐに修正できます。

### 新課程にこそ指導の効率化が求められる

**稲垣** 川村先生の勤務校ではデジタル機器は整っているのでしょうか。

**川村** 各教室に電子黒板があるわけではなく、特にデジタル機器は整っていません。私の授業は、化学実験室に生徒が来る形にしています。そこにはスタンド型スクリーンを設置し、常にプロジェクターとパソコンをつないでおくことで、授業の度に準備をしないで済むようにしてあります。本校では年に3、4回、研究授業週間があり、他教科の授業を参観する機会があります。私の授業を

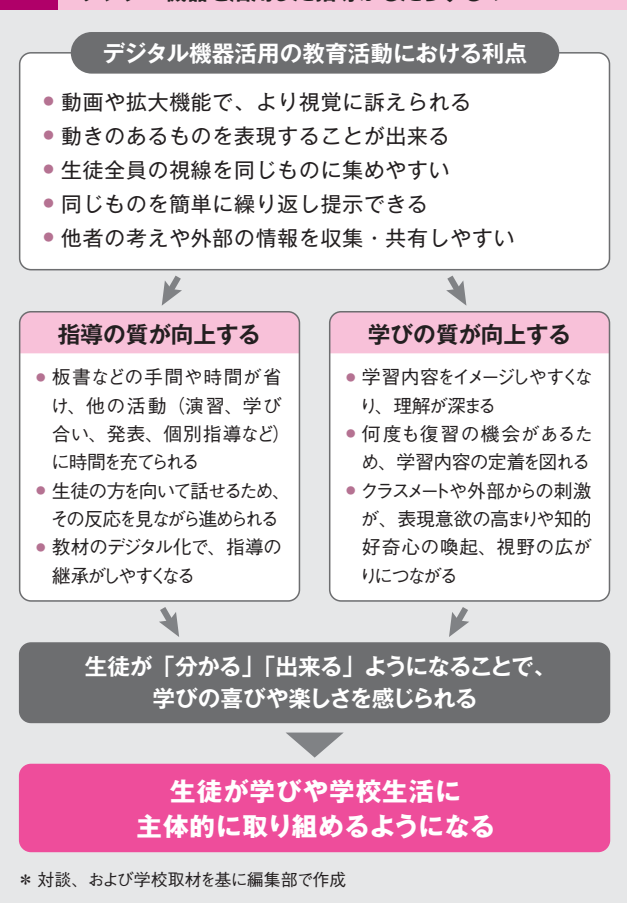


見た先生方に「面白いですね」「分かりやすいですね」と言われますが、その先生方がデジタル機器を使って授業をするかという点、教室にスクリーンなどの設備がないために行ってしまうというのが現状です。

**稲垣** 指導を効率化できるのがデジタル機器の利点なのに、スクリーンをいちいち設置するところから授業を始めては本末転倒です。

**川村** 私は、今もスクリーンの横にスタンド式の黒板を置いています。ちよつとした計算や図を足したい時に、黒板に書いた方が早いからです。

図2 デジタル機器を活用した指導がもたらすもの



**稲垣** そうした使い分けで私もよいと思います。デジタルの時代だから授業でもデジタル機器を使わなければならぬということではなく、生徒が理解しやすくなる、演習や学び合いの時間を確保したいといった要望をかなえる手段がデジタル機器であれば活用すればよいと思います。

**川村** 高校では2013年度に新課程が1年生から順次、全面实施となります。数学や理科を中心に学習内

容が増えたことから、授業時数を増やしたり、そのために学校行事を減らしたりして対応する学校もあるようです。しかし、学習内容を増やしたからといって学力が上がるものではなく、いかに分かりやすい授業をし、生徒の理解を深めるかが大切です。授業にデジタル機器をうまく活用して指導の効率化・充実化を図れば、私たち教師が大切にしたい学校行事や部活動などの時間を減らす

ことなく、生徒の学力向上を実現できるのではないかと期待しています。

**稲垣** ほとんどの学校が校務にパソコンを使っていると思いますが、そこでも効率化が図れば、指導に当てられる時間が増えると思います。

### デジタル機器を使うと生徒が主体的に学ぶ場を設けやすい

**川村** デジタル機器を取り入れてから、大半の生徒が「分かる」まで到達するようになりました。本校に赴任して1年が経ちますが、以前より化学の成績は上がっているようです。今は「出来る」「活用する」を授業にいかに取り入れるかを模索しています。それらをうまく行えれば、生徒を主体的な学びに導けるのではないかと考えています。

**稲垣** 生徒が主体的な学びに向かうようになるためには、そうした場を授業に設定することが重要です。今までは教師が全て教えていたことを、ここまでは教師が教え、ここから先は生徒が自ら答えを探していくという場面です。自分で考える、友

だちと話し合う、教科書や専門書を読む、インターネットで探すなど、答えを見つける手段はいろいろあるでしょう。そこで、自分に必要な情報を探し出し、解決をするという学習の枠組みを作るために、デジタル機器は有用だと思っております。今は、先生方が指導の一部を効率化させたり、生徒の理解を促進させたりする道具としてデジタル機器を使うのが一般的ですが、小学校や中学校ではタブレットPCを1人1台持たせ、学び合いや調べ学習に活用する学校が出てきています。情報を活用するためには子どもが主体的に学ぶ場が必要ですし、情報活用能力が付くような授業をすれば、自ずと主体性は育まれるのではないのでしょうか。

**川村** それで、私の今後の課題です。社会は情報を活用することによって動いていて、大学選びでも就職活動でも、自分から必要な情報を見つけ出すことが必要であり、そうした力が必要ならば生きていけません。時代が要求する「生きる力」を付けられるような授業をしたいと思っています。

# 協同的な学びとデジタル機器を用い

# 生徒の主体性を引き出す学びを実現

学びの質を向上させるために——。広島県立廿日市高校は、その実現の手段として、協同的な学びとデジタル機器を授業に取り入れている。デジタル機器を活用して指導の一部を効率化し、それによって得られた時間を使ってグループ学習などを増やしていった結果、多くの生徒が一層意欲的になり、発展的な学びに自ら向かうようになったという。

## 協同的な学びを実践するために デジタル機器を活用

広島県立廿日市高校は、2011年度に才木裕久校長が赴任して以来、生徒の学びの質を向上させるために協同的な学びとデジタル機器の活用を取り入れた授業を一層強化している。才木校長は、その背景を次のように話す。

「生徒は将来社会に出れば、価値観や考え方の異なる多様な人々と円滑に意思疎通する力が求められます。その力を伸ばすために、生

徒が学校で最も多くの時間を過ごす授業の時間に、友だちと学び合う活動、すなわち、協同的な学びを増やしたいと思いました。ただ、授業時間数と学習内容は変えられませんから、そうした活動をするための時間をいかに確保するかが課題になりました。そこで、デジタル機器を使って指導の一部を効率化しようと考えました。つまり、協同的な学びの時間を確保する手段として、デジタル機器を活用することにしたわけです」

同校には、以前からプロジェクトや書画カメラといった機材が備

えられていたが、それらを積極的に授業で活用する教師がいる一方、消極的な教師もいたと、柞磨昭孝教頭は振り返る。

「デジタル機器に不慣れた教師からは、『使い方が分からない』という声が聞かれました。しかし、生徒のためになる技術であれば、研修などを通して使いこなせるようになるうとするのが教師です。『何のために使うのか』という目的が見えなかったことが、デジタル機器の活用に積極的になれなかった要因の1つではないかと思えます」

そこで、取り組みを始めるに当たり、まずは才木校長自身が朝礼や職

### 広島県立廿日市高校

- ◎1913（大正2）年開校。「堅忍不拔」「忠実服業」を校訓とする。広島湾を望む、広島県の南西部に位置する。
- ◎形態/全日制・定時制/普通科/共学
- ◎生徒数/1学年320人
- ◎12年度入試合格実績（現浪計）
- ◎公立大には、京都大、大阪大、神戸大、岡山大、広島大、九州大など133人が合格。私立大には、明治大、早稲田大、関西学院大、同志社大、立命館大などに660人が合格。
- ◎住所/〒738-10004
- ◎広島県廿日市市桜尾3-1-1
- ◎電話/0829-1321125
- ◎URL/  
<http://www.hatsukaichi-hiroshima-c.ed.jp/>

員会議などで、協同的な学びの意義やデジタル機器による指導の一部の効率化の狙いを繰り返し述べ、全教



**才木裕久** さいき・やすひさ  
広島県立廿日市高校校長  
教職歴36年。同校に赴任して2年目。「この国の未来を担う、志高く国際的視野を備えた人材を育てたい」



**柞磨昭孝** たるま・あきのり  
広島県立廿日市高校教頭  
教職歴30年。同校に赴任して2年目。「自分の考えを持ちながら、他者を思いやれる人間を育てたい」



**倉本恵美子** くらもと・えみこ  
広島県立廿日市高校  
教職歴31年。同校に赴任して11年目。主幹教諭。「生徒主体の指導を追究したい」



**上野耕嗣** うえの・こうじ  
広島県立廿日市高校  
教職歴27年。同校に赴任して8年目。教務主任。「デジタル機器の活用を広めていきたい」



**福本靖之** ふくもと・やすし  
広島県立廿日市高校  
教職歴29年。同校に赴任して6年目。3年生担任。「生徒の自主的な学習を後押しする指導を目指したい」



**伊山秀二** はたけやま・しゅんじ  
広島県立廿日市高校  
教職歴28年。同校に赴任して4年目。3年生担任。「デジタル教材づくりを楽しむ、生徒の力を伸ばしたい」

師に理解と協力を呼び掛けた。

また、デジタル機器に関心を持っていた教師が中心となって、協同的な学びの研修を始めた。デジタル機器を使って先進的な取り組みをしている教師や研究者を講師として招き、模擬授業をしてもらう機会を年2〜3回つくるようになった。更に6月中旬の2週間を「授業観察週間」とし、協同的な学びを取り入れている授業を見学するよう呼び掛けた。

その結果、次第にデジタル機器を活用する教師が増え、協同的な学びも行われるようになった。12年度は、全教師の4割近くが何らかの形でデジタル機器の活用を授業に取り入れるまでになったと、教務主任の上野耕嗣先生は話す。

「デジタル機器の数に限りがあるので、残念ながら、どの先生の希望にも添えるわけではありません。使いたいと思っている先生はもつといえると思います」

では、授業でどのようにデジタル機器を活用しているのだろうか。国語、物理、公民の3教科の授業の様

子を見ていこう。

### 授業での実践 ① 国語

#### 書画カメラの活用により指導の効率が上がった

3年生の現代文を主に担当する主幹教諭の倉本恵美子先生は、教科書の本文や入試問題の素材文などを書画カメラでスクリーンに映して解説している（P.14図1）。以前は、その日の授業で扱う文章を全て板書していたという。

「生徒の読解力を伸ばすためには、意味段落ごとなど、ある程度まとめた文章を示し、それに傍線を引いたり、書き込みをしたりしながら解説した方がよいと私は考えています。そこで、必要な文章を全て板書していたのですが、手間と時間が掛かる上に、生徒の返答に応じて文章を書き足すことも多く、指導の効率がよくありませんでした」（倉本先生）

書画カメラを使うようになって、指導の効率は劇的に上がったと、倉本先生は話す。

「映写するだけで、文章の全体も

部分も瞬時に示せるようになりました。生徒が文章のどの部分に着目して意見を言っても、すぐに該当箇所を映し出して解説できますから、以前とは比較にならないほど時間を短縮できるようになりました」

#### 生徒の目の前で答案を添削し解説することで理解を促す

板書に掛かっていた時間は、協同的な学びに充てられた。その中身は、生徒を3〜4人のグループに分けて行う、問題演習だ。まずは自分で考え、分からなかったら友だちに相談するよう伝えている。

「友だちが相手であれば気兼ねなく質問できるようです。分かるまで何回でも聞く生徒もいます。一方で、解けた生徒は、友だちに教えることで理解が深まるようです」（倉本先生）

この問題演習の解説にも、書画カメラを活用している。選択式の問題の場合は、倉本先生に指名された生徒が前に出て、自分の答案や素材文を映しながら、なぜその選択肢を選

特集 「主体性」の育成 ① 「分かる」授業の追求で、学びの「主体性」を引き出す

協同的な学びと書画カメラを使った古文文法演習の授業の様子を見てみよう。

**1 古文文法の小テスト**

5分

センター試験の過去問題から抜粋した問題が6問。「ただまぼり奉らまほしきに」「まめだち給へる御まみのわたり」など、設問文の中で示された古文を品詞分解し、文の解釈として正しい選択肢を選ぶ。

**2 自己採点・生徒による書画カメラを使った解説**

10分

解答が配られ、生徒は自己採点する。満点だった生徒のうち1人が前に出て、書画カメラで自分の解答を映し、選択肢をどう絞り込んだかを説明する。



生徒は自分の答案をスクリーンに映し出しながら解説する

**3 問題演習**

10分

センター試験の過去問題から、古文の現代語訳の問題を2問出題。本来ある選択肢は消しておき、生徒に現代語訳を記述させる。前半の5分間は1人で考え、後半の5分間は4人1組のグループとなって、グループ内で最も優れた現代語訳はどれかを話し合う。

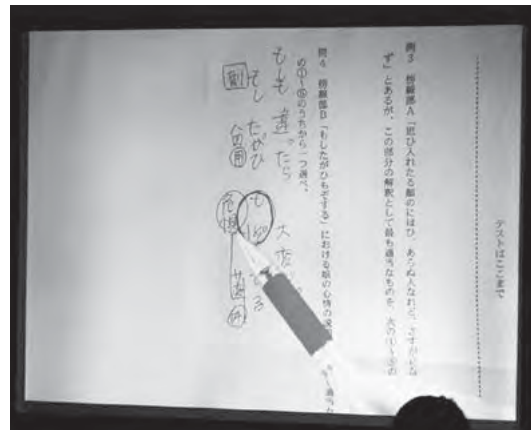


生徒は互いの答案を見せ合いながら、古語の意味、品詞の種類などを確認し、誰の現代語訳が最も良いかを検討

**4 生徒による書画カメラを使った解説**

10分

倉本先生が1つのグループを指名し、代表者が前に出て、書画カメラにグループで選んだ答案を映しながら、どう訳したのかを説明する。



生徒は助詞「もぞ」の意味に注目して訳したと説明。その場でプリントに書き込んだ内容がスクリーンに映し出されるため、他の生徒にも分かりやすく伝えられる

**5 問題演習**

2分

③の問題と同じ文法事項を扱った選択式の問題を、各自で解く。

**6 答え合わせ・倉本先生による書画カメラを使った解説**

3分

倉本先生が書画カメラを使って解答の解説をする。

**7 生徒による書画カメラを使った解説**

3分

⑤の問題に不正解だった生徒をあえて指名し、なぜ間違えたのかを説明させる。不正解だった生徒の思考過程を見せることで、間違いやすいところに注意を促す狙いがある。

んだのかを説明し、その説明に対して倉本先生がコメントする。

「素材文中にある解答の根拠をスクリーンに映し出し、指し示しながら話せるので、生徒は自分の考えを伝えやすくなったと思います。以前よりも積極的に発言する生徒が増えています」(倉本先生)

記述式の問題の場合は、倉本先生が生徒の答案を選び、それを書画カメラに映しながら添削する。

「以前は、記述式の問題はいったん回収して添削し、次の授業で返却して解説してました。答案の提出から返却までに時間が空くため、生徒は答案に書いたことの根拠を忘れてしまい、添削された答案を見ても、すぐにはピンとこないようでした。しかし今は、書いてすぐに生徒の目の前で添削し、良い点、悪い点を指摘できますから、生徒は答案作成のポイントを理解しやすくなったと思います。また、友だちの優れた答案を見ることで、『自分も負けないように頑張ろう』と、競争意識も生まれていると感じます」(倉本先生)

## 抵抗があったデジタル機器だが使ってみて良さを実感した

今では授業で必ず使っているが、才木校長が活用を呼び掛けるまで、デジタル機器には関心がなかったと、倉本先生は話す。

「板書の手間を減らし、授業で協同的な学びを行うためにはどうしたらよいかを考えていました。上野先生に相談したところ、書画カメラを勧められました。自分には使いこなせないだろうと思っていました。しかし、試しに使ってみると、操作は簡単で、板書の手間を減らすという長年の課題はあっさり解決し、協同的な学びを取り入れる時間も確保できました。そして、生徒の主体性や意欲を引き出せるような授業が出来るようになったのです」

### 授業での実践 ② 物理

## 情報整理と視覚的効果により分かりやすい授業を実現

3年生の物理を担当する福本靖之

先生は電子黒板を用い、画像を駆使した授業を行っている。情報科の教員免許も持っており、以前からデジタル機器に対する関心は高かったため、才木校長の呼び掛けにすぐに応じて活用し始めた。

電子黒板を使う狙いは2つある。1つめは、情報を整理して生徒に示すことだ。教科書や問題集に掲載されている重要用語や図表、公式・解法などを、PowerPoint<sup>®</sup>で作成したスライドに集約して解説している(P.16 図2)。

「例えば、設問とそれを解くために必要な図表が教科書の違うページに載っている場合、以前はページを行ったり来たりして、生徒を混乱させがちでした。スライドを使って設問も図表も1枚にまとめれば、必要な情報を整理でき、生徒に分かりやすく示せると考えました。あちらこちらを参照させる必要がなくなったため、解説も一気にでき、解説に掛かる時間も短く出来るようになりました。また、板書をしていた頃は、板書中は生徒に背を向けていたが、

が、電子黒板でのスライドを使った解説であれば、生徒全員の顔がこちらを向いているかどうかを確かめながら授業を進めることが出来ます」

2つめの狙いは、生徒に学習内容を具体的にイメージさせることだ。

「物理は、原子や分子、電荷といった目に見えないものを多く扱う科目です。そこで、学習する現象や法則がどのようなものなのか、生徒がイメージしやすいように動画を用いています」(福本先生)

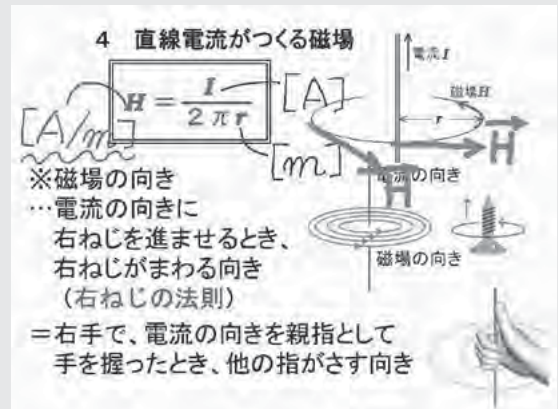
こうしたデジタル機器を活用した指導の工夫によって生徒の理解度は上がり、授業への積極性も高まっていると、福本先生は話す。

「どの生徒も問題が解ければうれしいものです。『分かった』という喜びが学習意欲に結び付き、学習に対するモチベーションを高めていると感じます」

## 協同的な学びによって更に学びの質が向上する

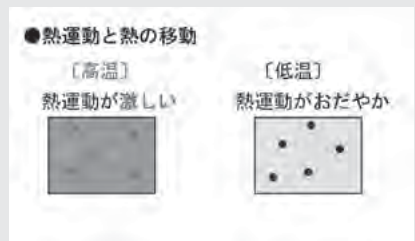
福本先生の授業の流れは次のようにまとめられる。

図2 物理の授業（3年生）



福本先生が授業で解説するスライドは、事前にプリントにして生徒に配布するが、授業をしっかりと聞かせるために、一部を空欄にしている。空欄は、福本先生が電子黒板に直接書き込んで埋める。生徒はそれを見て、プリントの空欄を埋める

形がなかったり、肉眼では捉えにくかったりする物理の現象を動画で見せることで、学習内容をイメージしやすくする



教科書の例題と練習問題を1題ずつ、まず1人で、次いでグループで相談しながら解く。例題は自力で解ける生徒が大半だが、練習問題は友達と話し合っただけで解く生徒が多い

- ① 前回の授業の復習（5分）
- ② 今回の学習内容の説明「インプット」（10分）  
初めて学習する公式や解法、現象を概説する。  
「電子黒板で PowerPoint® のスライドや動画を活用することにより、具体的なイメージを持たせながらポイントを押さえた解説が出来るので、10分という短い時間でも、生徒はその日の学習内容の基礎的な部分をしつかり理解できていると思います」（福本先生）
- ③ 問題演習「アウトプット」（10分）

- ④ 解説（5分）  
電子黒板を使って福本先生が解説。ここで基礎を定着させる。
- ⑤ 問題演習（15分）  
③で出題した問題よりも難易度の高い問題を2〜3問出題し、③と同じように生徒同士で学び合う。

教科書から基本問題を1〜2問出題し、生徒が3〜4人のグループに分かれて学び合う。どの生徒にもしっかりと考えさせるために、まずは1人で解き、分からなかった場合は友だちに相談するよう指導している。

解説に電子黒板を使うようになってからは時間にゆとりが生まれ、協同的な学びが行えるようになった。その協同的な学びによって、学びの質は更に向上していると、福本先生は話す。

「協同的な学びでは、複数の友だちから多様な考え方や説明を聞くことができます。その中には、教師以上に分かりやすいと感じられる考え方や説明があることもあります。生徒

- ⑥ 解説（5分）  
⑤で出題した問題から難易度の最も低い1問を選び、電子黒板を使って福本先生が解説する。残りは今回の授業の冒頭で解説する。

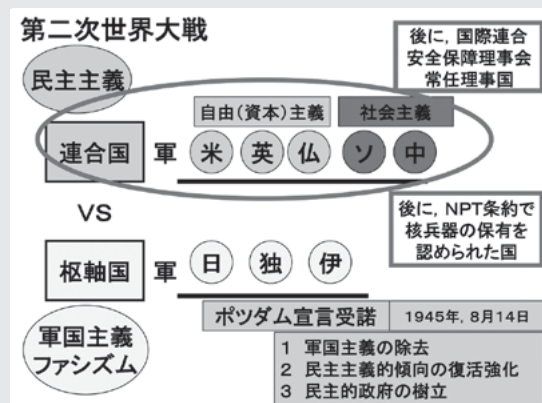
徒の学習内容の理解は協同的な学びによって深まるため、演習後の解説はポイントを絞ったシンプルなものに出来るのです。授業の良い流れが出来ていると感じます」

**授業での実践 ③ 公民**  
**重要事項は何度も示し しっかりと理解させる**

3年生の公民を担当する畠山秀二先生は視聴覚室を使って、パソコンとプロジェクターを活用した授業を行っている（図3）。これには2つの狙いがある。1つめは、反復学習を効率よく行うためだ。重要用語やセンター試験の過去問題などを載せた PowerPoint® のスライドを、関連する内容を扱う度に繰り返し生徒に示している。例えば、インフレとデフレそれぞれが通貨量や貨幣価値などにどう影響するかをまとめたスライドは、第1次世界大戦後や第2次世界大戦後の経済状況について学習する時だけでなく、バブル経済崩壊後の経済状況について学習する時にも示すといった具合だ。

「教科書や資料集、問題集などから重要な用語、良問を選びすぎり、

図3 公民の授業（3年生）



第2次世界大戦の「連合国」「枢軸国」の一覧。重要事項であるため、戦後日本の復興を扱う時にも、改めて示す



生徒が学習内容を具体的にイメージできるように、大きなスクリーンにスライドや動画を映写する。問題演習の際は、前後左右の生徒同士で協同的な学びを行う

生徒の記憶に残るよう、何度でも見せています。いつでも見直せるよう、プリントにして配布もしています」(畠山先生)

スライドによる反復学習は生徒から好評で、授業アンケートでは「『核となる部分』を何回も確認してもらえるので頭にしっかりと残る」といった声が目立つ。

2つめの狙いは、学習内容に対する生徒のイメージを豊かにすることだ。国会の機能について学ぶ時

に衆参両院での議決の様子を伝えるニュース映像を流したり、日本の高度経済成長について学ぶ時に同時代のテレビCMを流したりしている。

「行ったことがない場所や生まれていなかった時代について学ぶ場合、生徒はそれがどういうものなのかイメージしづらいと思います。関連する映像を見せれば、文字や教師の口頭による説明だけで学ぶよりも、何倍もイメージが具体的に becomes」と考えました」(畠山先生)

畠山先生の授業でも、毎回の授業で問題演習を行い、物理の授業と同様の協同的な学びを行っている。

### 協同的な学びによって 生徒も教師も変わる

生徒の学びの質を向上させようと、同校が協同的な学びとデジタル機器の活用を取り入れた授業を強化し始めて1年半ほど経ち、生徒には変化が表れている。

「以前は、教師による説明と板書が中心の授業ばかりでしたから、生徒は発言する場面がありませんでした。しかし、協同的な学びを行うようになってからは、どの生徒も率先して発言したり、積極的に質問したりするようになりました。デジタル機器を使って指導の効率を上げてよかったと思っています」(上野先生)

ただ、指導には効率化すべきでない部分もあると、才木校長は話す。

「考えたり、感じたりといった、生徒の感性の部分は効率化せずに、大切に育てていく必要があります。感性がしっかりとれているからこそ、

視覚や聴覚に訴えるデジタル機器の効果も上がると考えています」

教師にも変化が見られると、柞磨教師は話す。

「以前は生徒から質問されると、教師が全てを教えてしまっていました。協同的な学びを取り入れるようになってからは、あえて手を差し伸べず、『友だちに聞いてみたら?』と言う教師の姿が目立つようになりました。生徒の主体性を引き出すためには、教師が手を差し伸べない勇氣も必要であることが、先生方の間に浸透してきていると感じます」

才木校長は、今後について次のように話す。

「協同的な学びとデジタル機器の活用によって、生徒の意識も教師の意識も変わり、学びの質が高まっていると感じます。機材を増やしたり、研修体制を整えたりすることで、どの先生方も協同的な学びとデジタル機器の活用に前向きに取り組み、どの教室、どの授業でも、生徒の主体的な学びがあふれている、そんな学校にしていきたいと考えています」

## 小・中学校の 取り組み

# デジタル機器の活用が 子どもものの学びの可能性を広げる

小・中学校では、近年、デジタル機器の活用が、教師の指導のツールとしてだけでなく、子どもものの学びのツールとしても進んでいる。デジタル関連の研究指定を受けている2校に、指導や学びへの取り入れ方とその効果を聞いた。

### 小学校の取り組み ― 山形県寒河江市立高松小学校

## 学び合いの時間が増えると共に 子ども同士が考えを共有しやすくなる

### 校内研究などを通して 効果的な活用法を共有

特産品のさくらんぼをはじめとした田園地帯に位置する寒河江市立高松小学校は、各学年1学級の小規模校だ。幼少期から小学校卒業までをほぼ同じ集団で過ごすため、多様な人間関係の中でのかわりが少ないという課題がある。そのため、同校が重視しているのは、子ども同士の

「学び合い」だ。伊藤順一校長は次のように説明する。

「自分の考えを主張したり、相手の話に耳を傾けたりする場を設けることにより、互いの立場を考えながら、よりよい関係を構築する力を育て、社会に出てからも自ら伸びる子どもを育てることを目指しています」

学び合いの効果を高めるために、同校が活用するのがデジタル機器だ。2010年度、総務省の「フューチャ

ースクール推進事業」の実証校に指定されたのを機に、児童1人に1台のタブレットPCが配布され、全普通教室に77インチの電子黒板や書画カメラを設置。更に、各教室の他、特別教室や体育館でもインターネットに接続できる無線LAN環境も整備された。初年度はデジタル機器に慣れない教師が多く、手探りの状態で授業に活用。校内研究などを通して効果的な活用法を教師間で共有するにつれ、「ここぞという場面」でデジタル機器を活用すると学習効果が高まるという共通認識に至った。

### 電子黒板の表示機能の活用で 学び合いが活性化

学び合いの中でデジタル機器をど



寒河江市立高松小学校校長  
**伊藤順一** いとう・じゅんいち  
教職歴31年。同校に赴任して2年目。「子どもや保護者、地域から信頼される学校をつくりたい」



寒河江市立高松小学校  
**石澤紀雄** いしざわ・のりお  
教職歴28年。同校に赴任して6年目。教務主任。「互いのかかわり合いを大切に出来る子どもを育てたい」



寒河江市立高松小学校  
**石山志保** いしやま・しほ  
教職歴21年。同校に赴任して7年目。研究主任。3学年担任。「子ども言葉に耳を傾けたい」

### 寒河江市立高松小学校

◎1874（明治7）年に開校した八畷・谷沢の両校が前身で、130年以上の歴史を持つ。2010年度から総務省「フューチャースクール」、11年度から文部科学省「学びのイノベーション」の実証校。

◎児童数／137人

◎住所／〒990105225  
山形県寒河江市大字米沢64312

◎電話／023718711022

◎URL／<http://academics3.plata.or.jp/takamatu/>

のように活用しているのか。

学び合いの場面でよく使われるのは、子どもがタブレットPCに書いた内容を、教師が自分のパソコンで確認し、学び合いが活性化しそうなものを選び、その画面を電子黒板に表示する方法だ。電子黒板には最大9人分の画面を表示できるため、子

写真 9分割された電子黒板に、子どもがタブレットPCに書き込んだ内容が映し出される。クラス全員が素早く同時に共有できるため、話し合いや1人で考える時間を増やすことが出来る。



どもはさまざまな考えを同時に見比べることがしやすくなった。また、教師が手元のパソコンで、子どもの考えを素早く確認できるメリットも大きい。教務主任の石澤紀雄先生は次のように説明する。

「以前は、机間指導で子どもの学習状況を見て、黒板や画用紙に書かせて発表させていました。今は、子どもの考えを電子黒板にすぐに映し出せるため、時間の大幅な節約になり、話し合いにより多くの時間を充てられるようになりました。発言の機会が増えたことで、自分の考えを述べたり、相手の意見を聞いたりする力が以前よりも高まっています」

理解が遅れている子どもも、教師が手元の画面で把握できるため、すぐに個別に教えられるメリットも大きいという。

子どもが問題に取り組む間は、電子黒板に全員の画面をパツパツと数秒おきに表示させることもある。研究主任の石山志保先生はその狙いを次のように説明する。

「どこから手を付ければよいのか

分からなかった子どもが、友だちの画面を見て『こう考えればよいのか』とヒントを得て、自力で考え始めるきっかけになればよいと考えています。自分の画面も表示されるため、『とにかく分かるところまで書いてみよう』という前向きな気持ちも生まれるようです」

### 指導の選択肢が増え 試される教師の力量

タブレットPCに付いているカメラを使い、国語の音読、楽器の演奏、体育の実技など、授業中に自分のさまざまな学習活動を録画し、各自で確認する場面も設ける。

「例えば音読では、教師に指摘されるよりも自分が話している姿を見た方が、『もっとゆっくり話したほうが聞きやすい』など、改善に向けたイメージが湧きやすいものです。『もっとうまくやりたい』と、学習意欲も出てきます。録画は蓄積しておき、単元の最後に最初のものと比較させます。上達が一目で分かり、自信にもつながります」(石澤先生)

12年度は、タブレットPCを用いて家庭学習を充実させる試みにも力を入れている。インターネットを使った調べ学習、家族などへの取材、音読や楽器演奏の録画など、学習の内容はさまざまだ。調べ学習は、従来はコンピューター室で行うことが多かったが、事前に家庭学習として済ませておくことで、授業で学び合いの時間が十分に取れるといった好循環も生まれている。

教師たちは、デジタル機器の活用と学力の相関について、どのように捉えているのか。

「デジタル機器を使えば、必ず学力が高まるというわけではありません。デジタル機器の活用法を考える前に、『子どもにどのような力を付けたいのか』をしっかりと考えて授業を構成することが重要です。その上で、デジタル機器の特性が生かせる場面を見いだして活用すれば、従来よりも学力が高まりやすいということを、これまでの経験から感じています」(石澤先生)

教師が成果として特に感じている

のは、表現力の向上だという。

「子どもの『表現したい』という意欲が強まり、表現の幅が広がっていることを感じます。デジタル機器によって伝え合う機会が増えたため、『どうすれば自分の考えを分かりやすく伝えられるのか』を自分な

りに考えて表現しているからでしょう。指導の選択肢が広がり、子どもの可能性を伸ばしやすくなったことで、教師の力量がますます試されるようになりました。今後も研究に力を注いでいきたいと思えます」（石山先生）

## 中学校の取り組み ― 佐賀県立致遠館中学・高校

### 教科特性に合った活用で生徒の理解を深め その優れた指導法や教材の共有化も容易に

#### 授業の狙いを明確にし

#### 「ここぞという場面」で使う

佐賀県は、2011年度から「先進的ICT活用教育推進事業」を推進している。佐賀県立致遠館中学・高校の中学校では、実証研究校の指定を受け、電子黒板や電子教卓、無線LAN環境などが整備され、タブレットPCを生徒に1台ずつ配布し、デジタル機器を活用する授業を全校で始めた。

ICT推進リーダーの坂本明弘先

生は、取り組みを始めて1年が経つ現在の状況を次のように話す。

「本校では、9教科全てでデジタル機器(\*)を活用した授業を行っています。当初はデジタル機器をどう授業に取り入れればよいのか不慣れた教師がほとんどでしたが、1年間、試行錯誤をしながら活用のメリットを見極めていったことで、今ではメリハリを付けて取り入れられるようになりました」

例えば、動画や音声を使うとインパクトがあり、生徒の関心を引き付

写真 体育の授業では、友だちにタブレットPCに付いているカメラでマット運動の様子を撮影してもらい、後でフォームをチェック。自分の目で確認できるため、改善点もイメージしやすい



けやすいのでつい取り入れてしまいが、使い続けると生徒は飽きてしまい効果は薄れる。そこで、「ここを理解させたい」「この部分を定着させたい」という授業の狙いを明確にし、「デジタル機器を使うと効果があるところ」「使うべきではないところ」を見極めて授業を組み立て、授業のポイントとなる「ここぞという場面」に使うようになった。

「動画や音声で学ぶ内容を具体的に伝えられる、再現性に優れているので繰り返し学習に適しているな

#### 安易に取り入れると 生徒の学習姿勢に悪影響も

デジタル機器を活用する場面は、教科によってさまざま。

例えば、数学では、「定義域の移動に従って、最大値と最小値がどのように変化するか」といった数値に動きのあることを説明する時、今までは黒板で書く・消すを繰り返して説明していたが、電子黒板とデジタルペンを使えば説明しやすい。最大値と最小値が切り替わるところを拡大表示できるメリットもある。

地理や英語では、授業で登場する場所の今の様子を電子黒板に映し出し、映像を見て実感を深めると共に、「日本は今昼間だけれど、イギリスは夜なんだ」と目から入る情報により、グローバル感覚を養える。

「デジタル機器は教科特性に合わせることで使うことが重要であり、工夫次

\*[先進的ICT活用教育推進事業]の活動や校内においては、本誌で言う「デジタル機器」を「ICT機器」と表現している。

第で生徒の学びを深められることを実感しています」（坂本先生）

ただし、留意すべき点があると、坂本先生は自らの授業を振り返る。

「私は高校の数学も担当しており、空間図形の授業で、デジタル機器を使って3D映像や立体の切断面を生徒に見せました。生徒は立体図をイメージしやすくなったようでしたが、先に答えを見せたことで他の問題に対して安直に答えを求める傾向が一時的に見られました。生徒の思考力を育てるといふ観点で授業を構成することを忘れてはならないと痛感しました」（坂本先生）



佐賀県立致遠館中学・高校  
**坂本明弘** さかもと・あきひろ  
教職歴26年。同校に赴任して5年目。ICT推進リーダー。「主体的に活動できる生徒を育てたい」

### 佐賀県立致遠館中学・高校

- ◎併設型中高一貫校。中学校は2003（平成15）年に開校し、11年度から佐賀県の「先進的ICT利活用教育推進事業」の実証研究校に指定。
- ◎生徒数／中学校1学年約160人
- ◎住所／〒849-0915
- ◎佐賀県佐賀市兵庫町大字藤木1092-1
- ◎電話／0952-133-0401
- ◎URL／<http://www3.saga-ed.jp/chien-hs/>

## 7割の生徒が 授業が分かりやすいと回答

デジタル機器を使った成果は、少しずつ表れている。生徒にデジタル機器を使った授業についてのアンケートを取ったところ、「授業内容が分かりやすい」と答えた生徒は7割に上った。生徒から「これは動画で見せてほしい」という要望が挙がることも多く、教師は生徒の学習意欲が高まっているのを感じている。

「生徒が自ら学ぶ主体性を育てるためには、指導にさまざまな仕掛けが必要ですが、デジタル機器によりその選択肢は増えました。生徒が学ぶ面白さを発見したり、今までにならな体験をしたりすることで、『やってみよう』という意欲につながることを期待しています」（坂本先生）

中学1年生の数学の授業でデジタル機器を使って図形分野の指導をしたところ、小テストの平均点が100点満点中80点台であった。1年前の1年生で同じテストをした時の平均点が60点台だったことを考え

ると、デジタル機器による指導は学向上に影響があると言えそうだ。

## 有事にも遠隔授業で 学ぶ場を保障できる

現在は通信環境やセキュリティを考慮して、タブレットPCの使用は校内のみとしている。デジタル機器はドリル演習などの繰り返し学習にも適しているため、今後は家庭学習での使用を考え、タブレットPCの持ち帰りも検討している。

また、感染症の流行や災害などの有事にも、デジタル機器は有効だと坂本先生は話す。

「以前、インフルエンザが流行し、3年生の授業が2週間進められず、授業再開後の進度や生徒の学力に深刻な影響が出たことがありました。今は、病状が治まったら保健室に登校させ、遠隔授業を受けられるようにしています。今後、授業の録画を生徒の自宅に配信できれば、遅れのフォローも出来ると考えています」

坂本先生がデジタル機器に何よりも期待を寄せるのは、指導の平準化

だ。団塊の世代の大量退職により、若手教師が増えているが、デジタル機器が教師の経験不足を埋める1つの手段になり得ると考えている。

「デジタル機器を授業の狙いに応じて効果的に使えば、若手教師でも分かりやすい授業が出来ます。また、データ保存によって優れた指導法や教材を共有化しやすく、指導の継承にも活用できます。本校でも指導法の公開や教材の共有を行っています。今後、今後も推し進めて、指導力の向上に努めていきたいと思っています」

写真 タブレットPCの導入により、インフルエンザにかかった生徒は、病状が安定すれば、保健室で遠隔授業を受けられる



特集 「主体性」の育成① 「分かる」授業の追求で、学びの「主体性」を引き出す



岩手県立  
盛岡第三高校

教科指導改革

# 知識偏重から脱却し 考えさせる授業で 真の学力を育てる

◎「随処為主（付和雷同せず、主体性をもって生きる）」「鴻鵠之志（向上一路の精神で理想を追い求める）」が校訓。2011年度にSSHの指定校となり、「科学的探究力、発見的対話力、論理的思考力」の育成を目指す。

設立	1963(昭和38)年
形態	全日制／普通科／共学
生徒数	1・2年生約280人、3年生約310人
12年度入試合格実績(現浪計)	<p>国公立大は、北海道大3人、弘前大17人、岩手大84人、東北大37人、筑波大8人、東京工業大1人、大阪大1人、岩手県立大19人など233人が合格。私立大は、岩手医科大、青山学院大、中央大、法政大、明治大、立教大、早稲田大、立命館大などに延べ118人が合格。</p>
住所	〒020-0114 岩手県盛岡市高松4-17-16
電話	019-661-1735
Web Site	<a href="http://www2.iwate-ed.jp/mo3-h/">http://www2.iwate-ed.jp/mo3-h/</a>

変革のステップ

<p>背景</p> <p>◎膨大な課題や課外学習によって生徒が疲弊。未履修問題によって高校教育のあり方を再考させられた</p> <p>STEP 1</p>	<p>実践</p> <p>◎課題や課外学習を精選。「授業第一主義」を掲げ、生徒同士が考えを述べてかわり合う「参加型授業」を導入</p> <p>STEP 2</p>	<p>成果</p> <p>◎自ら考え表現する力と共に、進学実績が向上。生徒や校内が明るくなる。地域からの期待が高まり中学生の見学者も増加</p> <p>STEP 3</p>
---	---	--

量に頼った指導による  
生徒の疲弊が顕在化

岩手県立盛岡第三高校は、例年2000人余りが国公立大に合格する県内有数の進学校だ。過去、その進学実績を支えてきたのは、大量の課題や課外学習といった物量作戦ともいえる指導体制だった。しかし、それは、生徒の疲弊を伴うものであった。部活動も活発であり、生徒は深夜まで課題に取り組んで寝不足で登校するのが常だった。授業中の居眠りに、教師は目をつぶらざるを得ない状況だった。

そうした同校が抜本的な学校改革に取り組み契機となったのは、2006年に起きた、いわゆる未履修問題だ。この問題に直面したことで高校教育のあるべき姿の再考を迫られ、授業そのもので学力を付ける指導に転換する方針を固めた。佐々木修一校長はこのように説明する。

「従前の指導体制を引き継ぎ、授業も教え込みが中心で、教師にも生徒にも知識量イコール学力という意識があったのは否めません。しかし、我々が育てたいのは、次世代のリーダーとして活躍するような生徒だと、学校全体で確認しました。リーダーに必要なのは、高い志を持ち、自ら考え、それを周りに伝えられるような力です。そのために、授業を通して考える力や言葉にする力、ひいては『生きる力』を育てる必要性を感じました」

07年に全国各地の高校を視察し、自校に合った内容を検討。08年に改革の中心を担う経営企画課を立ち上げ、「三高改革」をスタートさせた。

## 課題を精選し 授業で勝負する指導に転換

まず着手したのが、課題や課外学習のスリム化だ。副校長の小笠原健一郎先生はこう話す。

「それまでは、生徒が必死に取り組んでも終わるか終わらないかというくらいの量の課



岩手県立盛岡第三高校校長  
**佐々木修一** ささき・しゅういち  
教職歴36年。同校に赴任して1年目。「さわやかに主張し、しなやかに従う」をモットーに、組織として生徒の指導に当たりたい。



岩手県立盛岡第三高校副校長  
**小笠原健一郎** おがさわら・けんいちろう  
教職歴29年。同校に赴任して3年目。「人間のトータルな能力は変わらない。先生方がそれぞれの担当で最大限の力を出せるように支援したい」



岩手県立盛岡第三高校  
**鈴木徹** すずき・とある  
教職歴28年。同校に赴任して8年目。経営企画課主任。「改革に終わりは無い。日々、そして授業ごとに改善する気持ちを大切にしたい」



岩手県立盛岡第三高校  
**継枝 斉** つくえだ・ひとし  
教職歴25年。同校に赴任して8年目。進路指導主任。「この方法で正しいのか」と常に疑問を持ちながら日々の指導を実践していきたい」

題を出していました。学習時間が学力に比例するという考えや、そうしなければ生徒は学習しないのではないかという不安が、どこかにあったのだと思います。しかし、授業そのもので学力を付けていくという本来の姿に立ち返り、課題は最低限の量に精選し、生徒の自主性を尊重した家庭学習の重要性を伝えるようにしました」

授業の充実のために、朝の課外学習を取りやめた上で、1日のコマ数は7コマと変えずに、1コマを45分から50分にした。授業方法も抜本的な変革を図り、生徒が能動的になる「参加型授業」を目指した。経営企画課主任の鈴木徹先生は次のように説明する。

「授業中、生徒が単に教師の話聞くだけの『観客』ではなく、主体的に参加する『プレイヤー』となることで、私たちが求めている力、すなわち思考力や表現力が育つと考えました。全ての教科でこの考え方を原点とし、授業をつくり直していきましました」

理想としているのは、生徒が互いにかかわり合う授業だ。ペアやグループによる学習活動、ディベート、ゲーム的な学習などが多く取り入れられ、「なぜ?」という教師の問い掛けに隣同士で活発に意見を交換し、発表する姿が自然に見られる。進路指導主任の継枝斉先生は、担当する数学の授業をこう変えたという。

「以前は、1コマで4、5問の問題を急がず

ように解かせていましたが、1、2問の良問に絞って丁寧に説明し、生徒同士が考え合う時間を確保するようにしました。こうした指導で理解を深めさせると、自然と『他の問題も解きたい』という気持ちが生まれて自主学習に結び付きます。じっくりと進めるようになってから、つまり生徒が激減しました」

家庭で取り組む課題を減らした分、定着するための学習はどのように補っているのか。

「例えば、9問の問題を書いたプリントを渡し、全てを9分間で解くように伝えます。良問に絞り、生徒に集中して解かせることで定着度が高まりますし、大学入試でも求められる、限られた時間で解を導くスピードも養えます。これまでの終わりが見えない課題に比べ、生徒は前向きな気持ちで取り組めるようになります。生徒が解きたくなくなるような課題を出すことも心掛けています」(継枝先生)

## 授業改革の成果を センター試験で検証

こうした授業方法の転換に、生徒は戸惑わなかったと鈴木先生は言う。

「私たちは、この地域の生徒はおとなしくて自分の考えを発信するのが苦手だと思込んでいました。そうした意識が、教え込みの授業スタイルを助長していた面もあります。

ところが、参加型授業に変えると、私たちが驚くほど、生徒は積極的にコミュニケーションを取るようになりました。実は、生徒は考えを発信する機会を待っていたのです」

むしろ、指導方法の転換にすぐに踏み切れなかったのは、教師の方だった。教師が知識量を重視しがちな理由を鈴木先生が指摘する。

「ベテラン教師は経験だけでなく蓄積もあるため、結果的に教科書レベルを超えた知識重視の指導しがちで、逆に若手教師は指導力への不安から知識量に頼る教え込みの授業をしがちです」

そこで、地理を担当する鈴木先生は、1つの検証を試みた。同学年を教える日本史と世界史の教師と共に、学習指導要領を改めて読み込んで分析し、科目や単元で「求められる学力」を具体的に把握。知識と共に、思考力・判断力・表現力などを育む重要性を確認し、これらを育むために参加型授業を始めた。その結果、センター試験の得点は大幅に上がった。

「この学年のセンター試験の平均点は、3科目とも目標値を大幅に上回りました。安堵と同時に、指導への自信を深めました。元々、地歴は暗記型教科と捉えられがちです。その地歴で参加型授業により良い結果が出たことは、他の教科にとって大きな衝撃となりました。学習指導要領に進じた『求められる力』を育てることが、受験対応力にも十分つなが

るといふ共通認識が出来ました」（鈴木先生）  
「求められる力」を明確にする授業づくりを、佐々木校長も教師全員に呼び掛けている。

「鈴木先生たちの授業は、育てたい力が明確で、その狙いを達成するために活動が位置付けられています。活動を行うことが目的化しては、本末転倒です。私もほぼ毎日、いろいろな先生の授業を見学し、授業改善のアドバイスをしています」

同校が改革の柱の1つとして導入した「Dプラン」も、生徒の授業参加を促した。これは「総合的な学習の時間」におけるディベートを中心とした学習活動で、「自ら考え、自ら学び、自ら発信」を基本理念とし、情報収集力、思考力、判断力、コミュニケーション能力などの育成を目的としている。ここで培われた力が、教科学習における学び合いにも生かされている。

「Dプランと教科学習が両輪となって、論理的に考えたり、自分の考えを発信したりすることが習慣付いていると感じます。このような力が付くことで、さまざまな教科で初めて出合う問題にも積極的に取り組めるようになると考えています」（小笠原副校長）

## 教師同士で授業を「気軽に」見合い 授業改善の方法を共有

全校を挙げて改革を推し進める上で重要な役

割を果たしているのは、校内研修における授業公開だ。これまで、同校で教師同士が授業を見合うことはほとんどなかった。しかし、授業改善には授業公開が不可欠と考え、改革の一環として取り入れた。

導入時に留意したのは、無理なく継続でき、かつ教科の壁を超えて学び合える体制をつくることだった。まず、負担軽減のため、指導案ではなく、「授業公開シート」を用意することにした（図）。指導案ほど詳細な流れを書くのではなく、他教科でも指導の観点が分かるように、「関心・意欲等を持たせるための工夫」「思考力・判断力をつけさせるための工夫」など、授業方法の工夫をポイントとして示した。参観者は気付いた点などをコメント欄に記入し、直接、授業者にシートを渡す。「授業を全て見ないでコメントをするのは失礼ではないか」という声もあったが、5分でも10分でも見学することは全く失礼に当たらないと周知して、気軽に見られる雰囲気をつくっている。

「他の先生の授業を見て、『こうすれば生徒の関心を引き出せるのか』など、ハツとすることはよくあります。導入の方法、まとめへの流れなどは、他教科の授業から大いに学んでいます」（継枝先生）

授業者は「少しでも他の先生の参考になる授業をしたい」と思うため、授業改善への意欲も高くなるという。

校内研修用 授業公開シート			
実施日 時間	平成23年11月28日(金)		
授業担当者			
教科・科目	地理B	対象ク	ラス
単元等	人口・食糧問題		
本時の狙いやポイント	日本の人口増加率のかたよりを把握させる。 各地域の抱える人口問題の特色を把握させる。	参観者	コメント
関心・意欲等を持たせるための工夫	データの読み取りおよび作図 身近な例から展開する。	参観者	コメント
思考力・判断力をつけさせるための工夫	自ら作図した図から、地域的な特色を読み取り、原因を考察させる。 一般例から帰納的に身近な例を類推させる。 身近な例から演繹的に一般法則を求める。 特殊例について、その要因について他者と議論しあう。	参観者	コメント
表現力や技能をつけさせるための工夫	上記で得た内容を言語化し、コミュニケーションさせる。 既習の知識を言語化し、コミュニケーションさせる。 作図	参観者	コメント
基本的な知識等を定着させたり、理解を深めさせるための工夫	教員からの受け取りではなく、他者と相談して回答させる。	参観者	コメント
その他の工夫	教員からの一方通行ではなく、多方向通行を目指す。 用語の暗記ではなく、「活用できる知識」とその定着を求める。	参観者	コメント

※ 参観者はコメントを記入の上、授業者あて直接お渡し願います。授業者の貴重な資料になります。

3年生の地理の授業での記入例。指導法の改善が目的であるため、授業者ではどのような工夫をしているのかを明記し、参観者に見てほしい観点を示している  
\*学校資料をそのまま掲載

## 生徒の学習に向かう姿勢が変わり 進学実績が大きく伸びる

授業公開は年間約30回行う。今後は、授業公開以外でも、例えば「練習問題を解かせている合間に」など、いつでも互いの授業を見せ合える関係を目指している。

改革の成果として、どの教師も口を揃えて言うのは、「学校の雰囲気明るくなった」ことだ。「生徒には時間的にも精神的にも余裕が生まれ、とても明るく、元気にあいさつをするようになりました。『自主性が尊重されてい

る』という責任感や自負心も高まっているようです」（小笠原副校長）

以前は体調不良を訴えて保健室を利用する生徒は少なくなかったが、今ではほとんどいないという変化からも、生徒が健全に過ごしていることがうかがえる。

また、進学実績も伸びている。国公立大合格者数は、08年度の219人から、12年度は233人になり、東北大の合格者も増加の一途をたどっている。

こうした成果を受けて、同校に対する地域の期待は今まで以上に高まっている。12年度の学

1200人もの中学生が、同校を訪れたという。

今後の課題の1つは、生徒の視野を広げ、県外の大学にも目を向けさせることだ。12年度の国公立大合格者のうち84人は岩手大であり、生徒や保護者の地元志向は強い。東京大や京都大など難関大に合格する力や適性を持つ生徒は少なくないと考えており、彼らの力を十分に引き出す進路指導へと変革させる考えだ。その一環として、12年度、教師一人ひとりに東京大の過去問題集を渡した。

「一部の教師だけが東京大に対応するのはなく、学校全体で生徒を支援する体制をつくるのが狙いです。教師がそれぞれ担当教科の10年分の過去問に取り組んで、生徒に東京大について語れるようにすることが第一歩と考えています」（継枝先生）

学校が育てたい生徒像と共に、高校生に本来「求められている力」を改めて確認。授業改善によって、自ら考え表現する力を身に付けさせ、人間的な成長に受験対応力を伴わせる。改革を始めて5年が過ぎたが、今後も、地域の要請に応じて、常に取り組みを改善していく考えだ。更に、県内の高校に同様の指導を広め、県全体の底上げを図りたいという目標も抱いている。

「生徒が生き生きと学んで学力を高められる教育を県内全体で進めていく上で、本校が中核的な役割を担えればと考えています」（佐々木校長）



◎イギリスのパブリックスクールを模範として創立。「レディー&ジェントルマン・エリート教育」を理念として、国際社会で必要な力を養う。イギリスのイートン・カレッジや、アメリカのウェリントン・スクールとの交流などの国際教育にも力を入れる。

<b>設立</b>
1981(昭和56)年
<b>形態</b>
全日制/普通科、理数科、英語科/共学
<b>生徒数</b>
1学年約400人
<b>12年度入試合格実績(現浪計)</b>
国公立大は、北海道大、東北大、筑波大、東京大、一橋大、名古屋大、京都大、大阪大、九州大、国際教養大、首都大学東京などに92人が合格。私立大は、青山学院大、慶應義塾大、国際基督教大、上智大、法政大、明治大、早稲田大などに延べ919人が合格。
<b>住所</b>
〒350-1336 埼玉県狭山市柏原新田311-1
<b>電話</b>
04-2954-4080
<b>Web Site</b>
<a href="http://www.bunri-s.ed.jp/">http://www.bunri-s.ed.jp/</a>

埼玉県・私立  
**西武学園文理中学・高校**

**進路指導**

# 生徒を個々に把握し 教師全員で生徒を支え 前向きな進路を促す

**変革のステップ**

<b>背景</b>	<b>実践</b>	<b>成果</b>
<p>◎進路選択に対して受け身で、自ら明確な目標を描ける生徒が少なかった</p> <p>STEP 1</p>	<p>◎データの活用、LHRにより自己理解や進路目標を描く力を高め、総合学習によりクラス間の交流を活発化</p> <p>STEP 2</p>	<p>◎客観的データによる指導と学び合う雰囲気醸成により、生徒が前向きに進路を選択するようになった</p> <p>STEP 3</p>

**自分を深掘りして「知る」ことで進路を選ぶようにさせたい**

西武学園文理中学・高校は、緑豊かな埼玉県狭山市にある中高一貫の私立校だ。1学年12〜17クラスという大規模校であり、21年連続で東京大合格者が輩出する進学校でもある。

進学実績が好調な一方で課題もあった。生徒は素直で勉強熱心な反面、明確な目的意識や自己理解に基づいて進路を決定する姿勢があまり見られなかった。進路指導主任の加藤潤先生は次のように語る。

「ここ数年で、自分の進路を深く考えなかったり、受け身でいたりする生徒が増えていくと感じます。『親が理系に行けと言った』就職に有利だから』という理由で理系を選ぶ生徒が目立ちました。しかし、理系に進んだからといって必ず就職できるわけではありません。大学で研究するにしろ社会で働くにしろ、自分の価値観や適性としてしっかり向き合った上で進路を選んでほしいと考えました」

3年生の秋になって志望に迷いが生じて面談を申し込む生徒や、大学進学後に自分の適性と学部内容のギャップに悩む生徒は少なくない。進路指導室で突然泣き出し、「A大を希望していたが、親に言われたから行きたいと思いついたのかもしれない。本当は海外に留学したい」と、悩みを打ち明けた生徒もいたという。

進路指導副主任の金井達亮先生は言う。

「保護者は大学名で人生が全て決まるわけではないと分かっているけど、我が子には高い学歴を求め、それが子ども自身による進路選択に影響を与えていることも事実です。しかし、生徒がしっかりと根拠を基に目標を決めれば、保護者は応援してくれます。そうなった時こそ生徒は自ら学び始め、学力を伸ばしていくものです。生徒が自信を持って進路目標を描ける指導が必要でした」

## 模試データを徹底活用し 志望校への意欲をかきたてる

生徒一人ひとりの前向きな進路選択を後押し



西武学園文理中学・高校  
**加藤 潤** かとう・じゆん

教職歴・同校赴任歴共に17年。進路指導主任。「生徒が社会に出た時に『一緒に仕事がしたい』と思われる大人を育てたい」



西武学園文理中学・高校  
**竹谷好広** たけたに・よしひろ

教職歴・同校赴任歴共に13年。進路指導副主任。「基本を大切に！ 努力3倍」



西武学園文理中学・高校  
**金井達亮** かない・たつあき

教職歴・同校赴任歴共に10年。進路指導副主任。「生徒の力を引き出すこと。そのために自分自身が成長し続ける」

するために同校が重視しているのは、模試成績や学習記録、生活習慣アンケートなどのデータの活用である。特に、模試の結果は徹底的に分析し、生徒一人ひとりの学力の伸びや苦手分野を把握すると共に、過年度生と比較して合格の可能性を予測し、生徒の進路選択や面談に生かしている。

データ活用の最大の目的は、生徒を励まし、志望校への意欲をかきたてることにある。1・2年生の面談では、教科ごとに苦手分野を明確に伝え、弱点の克服を促して一歩でも目標に近付けるように励ます。2年生の秋以降、入試を意識し始める時期には、生徒に自信を持たせるようなデータを意識的に示す。中でも生徒の心に響くのは先輩のデータだと、進路指導副主任の竹谷好広先生は話す。

「同じ学校で、自分たちと同じように学び、生活していた先輩の実績は、生徒にとって何よりも身近に感じられるものです。『君と同じような成績で合格している先輩がいるから頑張ろう』と励ませば、志望校と学力の差が多少あっても、生徒は諦めずに前に進むことが出来ます」

このように、生徒に自分の現実の学力を直視させ、志望校に届くようにするために、自分は何をすればよいのかを具体的に考えさせることで学びに向かわせて、進路に対する意識を高めている。

## 志望校検討会で生徒個々を分析共有し 担任の進路指導をバックアップ

3年生12月の志望校検討会でも、データは重要な検討材料となる。

志望校検討会では、第1志望校の合格可能性を見極め、合格に向けて必要なことを明らかにすると共に、確実に合格できそうな出願候補校を選ぶことも目的としている。第1・2志望校は生徒の意見を尊重して、ある程度の差があっても挑戦させるのが同校の方針である。その一方、生徒が心おきなく第1志望校に挑戦できるよう、検討会で併願校を選び、生徒に提示するのである。

検討用資料には、生徒一人ひとりについて、模試結果だけでなく、現在取り組んでいる問題集や悩みごとなど、学力以外の材料・情報も多面的に盛り込む。そして、特に併願校は、進路指導部と3学年団が知恵を絞って、議論して決める。データの裏付けもあるので、生徒も納得の上で出願するという。

志望校検討会の2つめの目的は、担任が自信を持って生徒と向き合える意識を醸成することにある。加藤先生は次のように語る。

「5年程前まで、志望校の検討はほとんど担任に任されていました。担任1人で問題を抱え込み、ひたすらデータと向き合い、悩んでいる重苦しい空気は、生徒にも伝わります。

「夢ノート」(例)

**第2回 他人から見た自分**  
 \*親・友人・先輩後輩などにアンケートを記入してもらい、客観的に自分を見つめ直し、自分を再発見する

**アンケート**  
 お名前 \_\_\_\_\_

これは( )についてのアンケートです。自分について深く考えるために実施しています。

1. この人の強み・得意なこと/弱み・苦手なこと をそれぞれ3つずつ挙げてください。

■強み・得意なこと  
 1. ( )  
 2. ( )  
 3. ( )

■弱み・苦手なこと  
 1. ( )  
 2. ( )  
 3. ( )

2. この人は、将来どのような仕事をしたいですか？また、なぜそのように思いますか？

■将来の仕事 ( )  
 ■その理由

記入例  
 ■将来の仕事：自動車の販売業。人を幸せにする仕事 ほど 夢想的でなくていいですね。  
 ■その理由：明るく元気があつた方がいい。また積極的なので、人前に話したり、先頭にたつてリードしたりする仕事がいいと思うから。

**アンケートまとめシート**

強み・得意	弱み・苦手
■私について(アンケートをもとに記入) 自分で思うこと(事前に記入)	
■気づかなかった意外なこと(事後に記入)	
■将来の仕事について(回収したアンケートをもとに記入) 自分がやりたいこと・気になっている仕事(事前に記入)	
■アンケートで書かれたこと(事後に記入)	

「夢ノート」の第2回は、身近な人に自分について聞き、客観的に自分を見つめる機会とする \*学校資料をそのまま掲載

生徒が前に進むためには、担任が自信を持って生徒と接することが大切です。進路指導部が志望校検討会を通して担任を支援することで、担任が自信を持って生徒との面談に臨め

ば、生徒も前向きに進路選択が出来ると考えました」  
 志望校検討の過程は、保護者にも伝えるため、学校に対する信頼感・安心感が以前に増して高まっているという。

「夢ノート」に人からの評価を記入してもらう

客観的な生徒把握を通じた意識付けと共に、LHRと「総合的な学習の時間」(以下、総合学習)を活用して進路意識の向上も行っている。1年生のLHRを中心とする活動は、2学期に作成する「夢ノート」だ(図)。自己分析を行い、自分の適性や将来の夢を描き、学びへのモチベーションを高めるのが狙いである。手順は以下の通りだ。

小・中学校時代の自分を振り返って、頑張ったことや影響を受けたこと、なりたかった職業などを書き込む。続いて、保護者や友だち、先輩に「他人から見た自分」というアンケートを記入してもらい、今まで気づかなかつた自分を知る。その上で、将来の仕事や生活などに思いをはせ、夢や目標を具体的に描く。最

最終的には、描いた目標を基に、1年生後半で文理選択を行う。

生徒の視野を広げるために、総合学習では社会人講演会を開く。取り組みの特徴は、生徒自らが講演依頼を行うことだ。話を聞きたいと思う人に、依頼理由と講演内容を生徒が依頼状を書いて送る。日程調整や講演料の関係で断られることが多いが、それだけに実現した時の生徒の達成感はひとしおだという。

「社会経験を積ませるために、あえて生徒に任せています。ある企業の代表取締役は、普通なら高校で講演を行うような方ではありませんでしたが、高校生から依頼を受けたのは初めてだからと喜んで来てくれました。生徒もやれば出来るという達成感を感じているようです」(加藤先生)

LHRは担任が個性や持ち味を発揮する場

LHRでは学期に数回、担任の自由裁量で運営される時間が設けられている。担任が個性や特技を生かして運営するこの1コマも、生徒が視野を広げ進路意識を高める上で大きな刺激となっている。

例えば、金井先生は、受験で悩むことの多い3年生の11月に、あえて自分の仕事上の悩みを生徒に打ち明けた。その後、グループになつて

生徒同士で悩みを語り合い、悩んでいる相手に応援メッセージを書いた。

「エリート選抜東大クラス」を受け持つ竹谷先生は、模試データを使いながら話をすることが多いという。クラスの学力の現状を語り、志望実現に向けた具体的な学習内容や問題集を紹介する。そして、自分が高校時代、どのように苦手教科を克服したのかといった経験談を交えながら、努力は必ず報われることを説く。

「入試に関する情報を伝えることも大切ですが、それ以上にLHRで重視しているのはクラスの和です。クラスがばらばらであつても、いくら一人ひとりの生徒の偏差値は高くても、大学入試で良い結果を得ることは出来ません。団結して行事を成功させる、きちんと皆で掃除に取り組み、互いに分からないところを教え合う。クラスの結束が、結果的に一人ひとりの志望実現にも結び付くことを、生徒に訴えていくことが大切だと思つています」(竹谷先生)

このように、担任が独自にLHRを運営できているのは、教師全員が同じベクトルで指導できているという安心感があるからだという。

「学校や学年団が共通の目標を持ち、教師全員で生徒に示しているからこそ、それを土台として、一人ひとりの教師が自由に個性を発揮しながら指導をする余裕が生まれるのだと思います」(金井先生)

## 総合学習や自習室が クラス間の垣根を取り払う

総合学習は、学年の一体感を保つ上でも効果を上げている。

同校は、普通科、理数科、英語科の3つの科があり、普通科は更に附属中学校から進学する内進生と、高校入学生である高入生、エリート選抜東大クラスが別々のクラスのまま3年間を過ごす。これだけ科・コースが分かれると、学年全体で足並みをそろえるのは難しいと思われが、同校ではクラス間の交流を頻繁に行い、学年全体で統一感を保っている。その結束力を生み出す秘訣の1つが総合学習だ。

同校の総合学習は、14〜15講座から生徒が選択しテーマ学習に取り組み。所属する講座は生徒の希望が前提であるため、結果的に学級横断の編成となる。クラスも進路も異なる生徒が集まり、1つの課題に向けて取り組む中で、自ずとクラスの垣根が取り除かれていくという。

進路指導室に隣接する自習室も、クラスを超えた生徒の交流の場だ。12年度入試では、3月の卒業式が終わった後にも、自習室にさまざまなクラスの生徒が集まってきた。既に合格した生徒も来て、後期日程を受験する仲間のためにグループディスカッションの練習をしていたという。この時、自習室で最後まで頑張っていた6人の後期日程の受験者は全員合格した。クラ

スを超えて生徒同士が支え合い、勝ち取った合格だった。

「私立高の場合、とかくコースごとに壁ができ、閉鎖的になりがちです。コースの壁を取り払うことで、仲間意識が高まり、それが進路意識の向上や学びに向かう原動力にもなるのです」(加藤先生)

## 中高6年間を見通した 指導体制の確立が課題

今後の課題は、模試データの活用を更に多くの教師に広げていくことだ。データよりも経験に頼った指導をする教師はまだ多い。より多くの教師がデータを活用した学習指導が出来るよう、その活用方法の普及に努めていく。

もう1つの課題は、教師の足並みがよりそろうように、中高6年間を見通した指導体系を構築することだ。

「個々の教師の指導力は高いのですが、学校全体としてまとまりきれていないと感じています。教師全員で結束して取り組める体制が出来れば、本校はもっと伸びていくと思います。教師が輝いていなければ、生徒も輝きを失うでしょう。年齢やキャリアを超えて教師が団結する意識を醸成し、相乗効果を発揮できる組織づくりを進めていきたいと思えます」(加藤先生)

# 30代教師の転

起

きる！

失敗やつまずきを転機に、授業力を高める！



## 全員の興味を引き出すために 生徒の実態に応じた指導を追究

私が乗り越えてきたもの

難関大の入試問題が解けなかった私

大学卒業後の数年間、常勤講師として福岡県内のさまざまな公立高校で教壇に立ちました。毎年のように勤務校が変わりましたが、私はどの高校でも同じことを心掛けた。それは、生徒の日常と生物の知識をつなぐこと

です。ニキビの原因など、生徒に身近な例を挙げたり、実物の植物に触れさせたりすることで、生徒が生物に興味を持つ授業を目指しました。実際、多くの生徒が関心を示してくれました。

しかし、進学校で初めて3年生を担当した時に、思わぬことでつまづきます。ある日、生徒が質問に持ってきた

ある難関大の入試問題を、私は解けなかったのです。思わず絶句してしまいました。その場は生徒を帰すしかありません。せつかく私を信頼して来てくれたのに申し訳ないと、情けない気持ちでいっぱいになりました。

視線を向けてくれない生徒がいる

教師としての準備不足を痛感した私は、多くの難関大の入試問題を解きました。「生徒からの信頼に応えたい」と必死でした。志望者が多い九州の国立大は出題傾向も分析し、その結果を授業で示すようにしたところ、生徒は

多様な生徒の学力に応じた説明が出来なかった

以前にも増して生き生きと授業を聞くようになりました。入試問題と向き合ったかいがあったと思いました。

28歳で私立大牟田中学・高校に採用された私は、ここでも生徒の関心を生物に向けようと意気込みました。しかし、生徒の視線は思うようには集まりませんでした。導入部分の雑談を交えた説明では全員の視線を感じるのですが、本論の説明を始めると何人かの視線が離れていくのを感じました。私の担当クラスは学力幅がとても大きかったため、一つの学力層の生徒を注目させられても、他の層の生徒までは引き込めなかったのです。何を話題にしても、誰かがつまらなそうな表情をする。そんな授業になっていました。



そのだ・なおし ◎教職歴14年。同校に赴任して9年目。担当教科は生物。1・2・3学年担当。福岡県・私立大牟田中学・高校 ◎全日制/普通科・総合学科・工業科・調理科/共学。12年度入試では、国公立大は九州大、筑波大、神戸大、熊本大、長崎大、佐賀大などに計28人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、立命館大などに延べ176人が合格。

福岡県・私立大牟田中学・高校

園田直嗣先生

36歳

## そして、これからも挑み続ける目標

### 生徒全員を引き付けるために

どうすれば生徒誰もが意欲的に参加する授業に出来るのか。このことを考えた末に取った方法が、基礎的な内容を違う表現で3回話すというものです。まず中位層向けに教科書に沿った説明をし、次に下位層にも分かる身近な例を提示して説明。そして上位層には、知的好奇心を刺激するような時事問題や入試問題を絡めた説明をしたのです。上位層向けの説明を聞くことで、中下位層の生徒も「自分も頑張ろう」と奮起してほしいと期待しました。

授業進度を守るために徐々に説明を進めても、その数は減りません。基本をしつかり押さえられたからだと思えます。授業アンケートでは「生物が好きになった」という声が多くなりました。私が出す演習課題に加え、自分で問題集を買って解くほど意欲的な生徒も現れ、私は教師冥利に尽きる思いでした。ところが、大牟田中学・高校に来て5〜6年が経った頃、私は改めて指導を見直すことになりました。既習の知識で十分に答えられる内容を問い掛ければ、以前はどの生徒も何らかの意見を言ってくれましたが、この頃からすぐに「分かりません」と答える生徒が目立ち始めたのです。理由を考えようと

せず、正解ばかりを求めていることは明らかでした。学習に対する生徒の意識が変わってきていると思いました。そうであれば、私も生徒の変化に応じて指導を変えなければなりません。

### 考える面白さを伝えたい

答えだけでなく、答えを導くプロセスにも興味を持たせたい。そう思った私はまず、発問内容を変え、常に理由を考えさせるようにしました。「サクランボのならない桜は、どうして子孫を残せるのだと思う？」などと、生徒の日常に引き付けた例も更に増やしました。また、教科書の記述は、研究者の「なぜ？」という疑問から始まり、多くの実験や観察を経て得られた結果

だと伝えることで、理由を追求する魅力を示そうとしました。

こうした指導の成果は、生徒の表情に表れました。私の問い掛けに、どの生徒も真剣に、そして楽しそうに考えるようになったのです。生徒の答えも射たものが増えています。最近ようやく、考える面白さを伝えられてきたと実感できるようになりました。

生物という学問の魅力を更に伝えるためには、私自身も学習し続けなければなりません。今でも毎週のように、大学主催の勉強会や研修会、問題集作りに参加しています。こうして学習し続けてこそ、最先端の知識を得ることができ、教員としての深みや人間的な魅力が生まれてくると考えています。

## 生徒に生物という学問の魅力を伝えていきたい



## 園田先生 の 授業実践

## Q&A

**Q** 生物に対する生徒の関心を引き出すために、授業でどのような工夫をしていますか？

**A** 毎回の授業の冒頭5分間は、教科書は開かず、その日の授業内容に関連する話をする時間にしています。例えば、遺伝や免疫の単元では血液型が出てくるので、「血液型性格占いに科学的根拠はあるか?」といった話をしたことがあります。

生徒が関心を持つ話が出るよう、月1回ほどのペースで、生徒から質問を募っています。B5判のプリントを配布し、生徒はそれに私に対する質問を書いて提出するのです。生徒がどのようなことを考えているかを知る機会になるため、この質問プリントは、私と生徒とのコミュニケーション・ツールであるとも言えます。

たくさん質問してもらえるよう、生徒には、内容は生物に限らず、興味のあることなら何を書いてもよいと伝えています。生物とは直接関係がないように思える質問でも、生物の知識で説明できるものは授業で積極的に取り上げます。

質問の答えは、私が説明するだけでなく、生徒に問い掛けることもありますから、知識を活用する練習にもなっていると思います。

**Q** 知識を定着させるために、指導でどのような工夫をしていますか？

**A** センター試験と同じ難易度の選択式の問題を2〜3問載せた復習プリントを、毎回の授業で配布しています。以前はもう少し多くの演習問題を解かせていましたが、他教科との学習バランスを考えた結果、今の分量に落ち着きました。

### メッセージをお寄せください

◎更なる授業力の向上を目指す園田直嗣先生へメッセージをお願いします。同じ課題を抱えている同世代の先生の共感の言葉、独自の授業スタイルを確立された先輩からの応援やアドバイスなどを自由にお寄せください。編集部より、園田先生へお届けします。

下記のe-mailアドレスに  
メッセージを送信ください

[view21\\_since-1975@mail.benesse.co.jp](mailto:view21_since-1975@mail.benesse.co.jp)

# 学び続ける集団をつくる 1年生2学期の定期テストデザイン

## 時期の特徴

行事や部活で忙しくなり、学習内容が難しくなることから、学習に気持ちが向かいはくくなる生徒が出現。学習を着実に進めている生徒との差が開き、成績下位層として固定化し始める。

## 指導のポイント

定期テストを学びに向かうきっかけに出来るよう、学年・教科団でテストの方針や設計を目線合わせする。クラスという集団性を生かしてテストを活用し、生徒の学習サイクルに組み込む。

※このコーナーは、高校の先生方との検討会を経て制作しております。

## 目的別データ活用

### 1 テストの狙いを 目線合わせし、 作問する

……→ 図1

◎定期テストの役割は、学習内容の定着度を測ることだ。だが、生徒の学力差が開き始めるこの時期は、定着度の確認だけで終わらせずに、各成績層の生徒が自信を付け、テスト後に意欲的に学習に取り組むきっかけとした。それには、成績中・下位層には「きちんと準備すれば点は取れる」ことを実感させ、上位層には「授業は大学入試と確実につながっている」ことを理解させることが必要だ。学年・教科団で成績層ごとの期待(想定得点)を踏まえて平均点を設定し、事前事後指導も目線合わせしながら、方針を決めて作問する。

### 2 狙いに合わせて 事前事後指導を 行う

……→ 図1

◎学年・教科団で作問の方針を目線合わせしたら、テスト前の指導を行う。下位層に自信を持たせることを重視するなら「小テストの中から〇割を出す」と予告し、復習に取り組ませてもよいし、上位層に対して「7月の模試の類題を1題出す」など、どこか見覚えのある初見問題を出すことを予告してもよいだろう。併せて、事後指導についても考えておきたい。テスト後に補習をするだけでなく、定期テストの内容を重要事項集として意識付け、次のテストに出すなどの方法もあるだろう。定期テストを単発の取り組みに終わらせず、年間の指導計画に位置付けたい。

## 対教師 への データ

作問と指導の観点を学年や教科で共有し  
各成績層の学習意欲を高める

## データを用いた指導の流れ

### STEP 1

◎「定期テストの方針検討シート」(図1)を用いて、定期テストの作問担当者が中心となって、今回のテストの方針を提案する

### STEP 2

◎学年団や教科団で、図1を基にテストの全体設計や事前事後指導を検討した上で、作問を行う

### STEP 3

◎定期テスト前の指導を行う。学力層ごとの定期テストの意味付けに沿って、復習箇所を指示したり、テストでの目標を生徒に伝えたりする

### STEP 4

◎定期テスト後の指導を行う。テスト前に計画したものを基に、予想以上に出来ていなかった部分を中心に復習などをさせる

◎テストの全体設計

大問番号	出題内容	配点	問題レベル別配点
1	L1 読解総合問題(客観式・記号多め・引用文長め)、小テスト	20点	難標準 5点 易 10点 5点
2	L2 読解総合問題(記述式・本文要約問題)、小テスト	40点	難標準 10点 易 20点 10点
3	L3 読解総合問題(記述式・引用文短め)、小テスト	30点	難標準 10点 易 10点 10点
4	小問集合形式で、模試の類題(初見問題)や小テストで解答率の低い問題	10点	難標準 5点 易 0点 5点

- 学年全体の目標平均点 ( 55 ) 点
- 成績層別の期待得点 上位層 ( 85 ) 点 中位層 ( 60 ) 点 下位層 ( 40 ) 点
- 補習を必要とする点数 ( 30 ) 点未満

◎事前指導と事後指導

対下位層	事前	小テストをおぼて復習させる。 文法を中心に直しをできるように伝える。
	事後	単語・文法で間違えた生徒は小テストを再度受けさせ、 設定した合格点に到達するまで取り組ませる。
対中位層	事前	授業での説明を見直しように伝え、 不明点をなくしておくよう呼び掛ける。
	事後	授業で扱ったこと間違えた問題はミスノートを作らせ、 なぜ間違えたのかを考えさせる。ノートは担当がチェックする。
対上位層	事前	初出の英文に取り組む方法をおさらいしておくように伝える。
	事後	模試で間違えたところと比較し、自分の弱点を把握するように伝える。



このマークのある図版は、加工可能なデータとして、小誌ウェブサイトからダウンロードできます。  
<http://benesse.jp/berd/> → HOME > 情報誌ライブラリ (高校向け) > 生徒指導・進路指導ツール集

現場からのアドバイス (プラスαの指導)

下位層の底上げなしに上位層は育たないことを理解する

生徒の学力差が開き始めると、教師の意識は「上位層をどれだけ残すか」に向きがちだ。だが、現実には下位層が多くなった学年は入試に対して前向きにならず、上位層も最後まで戦い抜けない。上位層だけが引っ張るのではなく、中・下位層が脱落せずにしっかりと付いていく学年をつくることの重要性を、教師が共通理解しておきたい。

学年集会、朝学習などの「場」を効果的に活用する

テストの返却や事後指導、未定着だった部分の補習などの必要性を感じても、授業や放課後の時間には制約がある場合もあるだろう。そこで、学年集会の場を定期テストの振り返りの時間にしたり、朝学習の時間を成績層別に分けてテストの復習を行う時間にしたりすれば、時間の効率化と共に、学年全体で指導の足並みをそろえることにもつながる。

下位層への指導は個別に、手厚く行う

成績下位層の固定化を防ぐためには、個別の指導が欠かせない。家庭学習も生徒任せにせず、放課後の教室で教師の目の前で実際に取り組みせ、問題の解き方、ノートの書き方などをチェックし、具体的に指導する。下位層の生徒には、面談や朝学習を通して、「勉強の仕方」を伝えること、そして何よりも「自分を見てくれている」と感じさせることが重要だ。

## 目的別データ活用

# 1 テストの結果を活用する習慣を付けさせる

……→ 図2

◎定期テストの返却時、生徒は得点に一喜一憂しながら、「次のテストではしっかり対策したい」と意欲を持っている。その気持ちを具体的な学習計画につなげられるよう、テスト返却後すぐに生徒自身が結果を基に「何が悪かったのか、今後どうすればよいか」を言語化する場を設けたい。特に、事前に出題を告知されていたのに出来なかった分野や、テスト時には自信があったのに不正解だった部分があった場合、その原因は学習時間の不足か、取り組み方の問題かを徹底的に振り返らせる。この作業は、模試の振り返りの習慣化にもつながるだろう。

# 2 問題の解き方や勉強法を学び合うクラスにする

……→ 図2

◎大学受験に向けては「励まし合える」「努力する者を笑わない」集団づくりが重要だ。だが、そうした意識の醸成は、3年生になってすぐ出来るものではない。1年生から、学び合う雰囲気と学び合うことのメリットを実感させることが、入試にも立ち向かえる集団づくりの基礎となる。そこで、定期テストの答案返却時、解けなかった問題の解き方を教え合ったり、成績上位者の勉強法を聞いたりする場を設けたい。意欲が高まるこの時期を逃さずに、生徒同士の語り合いから、大きな気付きを得させたい。

対生徒  
への  
データ

定期テストの振り返りを通して  
クラスを「仲間と学ぶ集団」にする

## データ活用の流れ

STEP 1	STEP 2	STEP 3	STEP 4
◎定期テスト返却時に「定期テスト振り返りシート」(図2)を使って、まず個々の生徒に振り返りをさせる	◎自分が出来なかった問題を中心に、友だちに学習法を聞き、図2に記入させる	◎次の定期テストまでにどのような学習を進めればよいかを考えさせ、図2に記入させる	◎生徒が書いたシート(図2)を回収し、ポイントを押さえられているかを確認する。その後の学習の進捗確認として用いる

今回のテーマと関連する過去のバックナンバーも併せてご活用ください！ 右のウェブサイトでご覧いただけます。

- 2007年9月号「1年生夏休み明けの意識付け」
- 2008年10月号「1年生2学期の成績層別面談指導」
- 2009年9月号「1年生秋の中だるみ対策と『第一歩』としての文理選択」

Benesse® 教育研究開発センター

<http://benesse.jp/berd/>

生きたデータの徹底活用  クリック!

HOME→情報誌ライブラリ(高校向け)→  
生徒指導・進路指導ツール集でご覧ください

加工可能な資料が  
ダウンロードできます!

生徒指導・  
進路指導ツール集

ウェブサイトで  
ダウンロード!

( ) 年 ( ) 組 ( ) 番 名前：( )

科目名：( )

◎定期テストの結果を振り返ってみよう

結果は  目標を上回った  目標通り  目標を下回った

その理由は  テスト前の学習スケジュール上の理由

テスト対策の内容面での理由

日々の予習復習方法などから見た理由

◎クラスメートに学習法を聞いてみよう ※出来るだけ、この科目が得意な人に聞こう（2人以上に聞いて内容を比較してもよい）

ふだんの学習内容、掛けている時間

テスト前の学習内容、掛けている時間

学習で工夫していること

◎上記を踏まえて、次の定期テストまでにどんな学習に取り組みたいかを書こう

担任コメント



このマークのある図版は、加工可能なデータとして、小誌ウェブサイトからダウンロードできます。  
<http://benesse.jp/berd/> → HOME > 情報誌ライブラリ（高校向け）> 生徒指導・進路指導ツール集

現場からのアドバイス〈プラスαの指導〉

苦手を克服した  
同級生の体験談を集める

生徒にとって、仲間が一生懸命勉強する姿に触れることは、何よりの刺激になる。特に苦手科目から逃げずに努力する様子、そして実際に克服した体験は「自分も出来るはずだ」と勇気を与えてくれる。1学期には苦手だった教科・科目を克服した生徒の体験談や勉強法を積極的に紹介したい。生徒自身にまとめさせたり、担任が聞き取りした内容を紹介してもよいだろう。

「横に寄り添う」  
リーダー層をつくる

クラスづくりにおいて、集団を引っ張るリーダーは重要だ。しかし、集団の中で特別すぎる存在であれば、中・下位層の生徒が「自分とは違う」と感じ、クラスが一体とならないおそれもある。成績は中位層だが計画的に努力を続ける生徒を褒めるなどして、他の生徒が「参考にしたい」と思える生徒をリーダー層に出来れば、生徒同士が横に並んで教え合い、学び合えるような関係が生まれる。

全員で戦うための  
仮想ライバルをつくる

「受験は団体戦」という意識は、1年生のうちから持たせるように働き掛けたい。定期テストや模試に向けて、クラス（学年）としての目標を提示して「みんなで達成しよう」と雰囲気高めることを心掛けたい。また、他クラスと点を競わせたり、「近隣のA高校ならこれくらいの点数だろう」などとライバル校を意識させたりするのも、集団意識を持たせるためには有効だ。

# AIDSの発症を防ぐ 抗ウイルス剤の新薬を開発

熊本大大学院 生命科学研究部 血液内科・膠原病内科・感染免疫診療部 満屋裕明研究室

2011年末時点で、全世界で約3420万人、日本では約1万4000人が感染しているといわれるHIV(ヒト免疫不全ウイルス)。細菌やカビなどに対する免疫機能を破壊するAIDS(後天性免疫不全症候群)を発症させるウイルスとして恐れられているが、現在では抗ウイルス剤が開発され、適切に服用すればAIDSは発症せず、非感染者と同等と言ってよい程に長く生存できるようになった。この抗ウイルス剤を世界で最初に開発したのが、熊本大大学院の満屋裕明教授だ。AIDS撲滅を目指し、現在も新薬を研究し続けている。

## フローチャートで分かる満屋研究室

### 大学院生の 主な出身分野

医学  
薬学  
化学  
工学  
など

◎大学院生の出身学部は医学部が多いが、博士課程では、薬学系や工学系の出身者も多い。他に、アメリカなどからの研究員が在籍する。

### 研究にかかわる 学問分野と研究内容



◎研究室は、血液内科・感染免疫診療部に属する。抗ウイルス剤の開発には、医学の知識はもちろん、ウイルス学、細胞生物学、結晶構造学、分子生物学、酵素生化学など、細胞やウイルスを構成するタンパク質、核酸などに精通していることも必要になる。

### 研究成果と 社会のかかわり

新薬の開発  
病気の治療

など

◎研究室での成果は、そのまま治療薬の開発に結び付く。また、研究過程で、別の病気の治療薬に結び付くような発見もある。

## 人々の幸せを守るという正義感と使命感

医学が求める学生像

大勢の人の幸せに貢献したいという正義感

研究に全精力をつぎ込む使命感

失敗の原因を追及し、次に生かす姿勢

医学を志す人は理想を掲げることが何よりも大切だと思います。私は、人は生まれながらに平等であり、全ての人が豊かで幸せな生活が送れる世の中をつくれるような職業に就きたいと考え、医師になることを選びました。医学ほど、直接、人の幸せにつながる分野はありません。医師や看護師の言動が、痛みと死に恐怖を感じている患者の心を和らげることが出来るのです。

研究では、全精力をつぎ込む気持ちで取り組むことが重要です。病気が治ることは、患者だけでなく、周りの人も幸せにします。私は、一番恐れられている病気を治療したいと思い、免疫不全症候群や白血病、AIDSの研究をしてきました。治療法はおろか、原因がよく分からない病気の研究では、うまくいかないことがもちろんあります。しかし、それは失敗ではなく成功への過程であり、その原因を突き止め、次につなげることが重要なのです。

**高校生へのメッセージ** 「よく学び、よく遊ぶ」。若い時に最も大切なことです。私は学生時代に、政治運動に参加していました。政治学、経済学、哲学、芸術とあらゆる分野の本を読み、そこで得られた知識を使って意見を戦わせていました。見る、聞く、知る、考えるがセットになって蓄積されていったことは、20代後半になって、自分の知的世界を形成する礎になりました。勉強するだけでも、遊ぶだけでも駄目。両方を一生懸命に取り組んで、いろいろなことを吸収して行ってほしいと思います。



満屋裕明 教授

みつや・ひろあき 熊本大大学院生命科学研究部教授、グローバルCOE「エイズ制圧を目指した国際教育研究拠点」拠点リダー。熊本大医学部卒業。熊本大医学部助手を経て、アメリカ国立癌研究所（NCI）に留学。1991年NCIレトロウイルス感染症部部長、97年熊本大医学部教授。2012年国立国際医療研究センター・臨床研究センター長に就任し、現在も各職を務める。2007年紫綬褒章を受章。慶應医学賞他、受賞歴多数。

### 研究概要

## AIDSが発症しないよう HIVの増殖を防ぐ 治療薬を作る

私たちの研究室では、AIDSの治療薬を研究しています。AIDSは、免疫細胞がHIVに感染することで、細菌やカビによる感染などから体を守る免疫機能が働かなくなる病気です。通常ならば侵入を防げるような病原菌やカビに感染しやすくなり、肺炎やがんなどによる死亡率が高くなります。AIDSの発症後、治療をしなければ、1年以内に50%が、2年以内に90%が死亡することが分かっています。

しかし、HIVに感染しても、増殖しないようにすればAIDSの発症は抑えられます。HIVが体内に入ってから増殖するまでの過程を解明し、そのどこかを阻害すればよいのです。現在、HIVの抗ウイルス剤は20数種類が実用化されており、ウイルスの増殖を防ぐ仕組みから分類して、治療薬には逆転写酵素阻害剤、プロテアーゼ阻害剤、融合阻害剤、CCR阻害剤、インテグラーゼ阻害剤の5パターンがあります。これ

### 研究のきっかけ、成果

## 世界初のAIDS治療薬を開発

元々、私が医学を志したのは、母の勧めによるものでした。親孝行をしたい気持ちもあって、熊本大医学部に入学。卒業後は附属病院の血液内科に入局し、「加齢と免疫」を研究テーマにしていた教授の下で、

原発性免疫不全症の研究をしました。そこでの業績が認められたこともあってでしょうか、32歳の時、アメリカ国立癌研究所（NCI）に留学。九州に感染者の多い成人T細胞白血病の病原菌であるヒトT細胞白血病ウイルスの研究をしました。日本では外来と入院患者を担当しながらの研究でしたが、アメリカでは研究に没頭でき、渡米半年でいくつもの論

文を発表できるほどの成果を挙げられました。

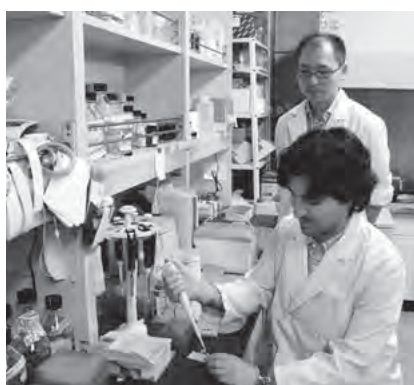
転機が訪れたのは、1984年、当時爆発的に広まっていたAIDSの治療法の確立が、アメリカの保健衛生上の最優先事項となったことにあります。実は、HIVが感染する細胞と、私が研究していたヒトT細胞白血病ウイルスが感染する細胞は同一のもので、人の免疫の仕組みを統括するCD4陽性細胞だったので、それまでの研究によって、私はCD4陽性細胞のクローンをつくる方法を確立させており、治療薬開発の研究開始に有利な立場にいました。死の病と恐れられているAIDSを治療する薬ならば、全世界に必要としている人が大勢いる——。私は新しい研究に着手したのです。

当時分かっていたのは、HIVが細胞を傷つける機能を持つレトロウイルスであること。そこで、最初の標的は逆転写酵素にし、この阻害剤を探そうと見込みのある物質で片っ端から実験しました。ただ、助手はHIV感染の危険を理由に実験の補助を断り、同僚には実験に研究室を使うなら辞職すると言われ、私は理

解を示してくれた他の研究室を夜間に借り、1人で実験を続けました。

やっと効果のありそうな物質が見つかりましたが、臨床実験で効果が得られませんでした。この頃から、私は逆転写酵素の働きを阻害する小分子化合物はないか探し始めました。

一方、共同研究をしていた製薬会社から、マウスのレトロウイルスには活性はあるものの、ヒトのレトロウイルスに対する活性は不明であるAZTという物質が提供されました。私はとにかく調べてみようと考え、実験をしました。すると、HIVに感染せず、強い毒性も見られなかったのです。続いて行った臨床実験でも同様の結果が得られ、87年、ついに世界で初めてのHIVの抗ウイルス



アメリカから留学中の Joseph R. Campbell さん。実験は地道な作業の繰り返しである。

ス剤が実用化されたのです。

## 研究の展望

### 実験結果の理由を突き詰めて考え、次に生かす

AZTには強い副作用があり、また1種類の薬を長期的に服用することによりHIVに耐性が生まれ、効果は限定的でした。しかし、私はこの

成果を基に2つの新たな薬を独自に開発。更に、プロテアーゼ阻害剤という全く別の仕組みによる抗ウイルス剤が開発され、AZTなどの併用により効果を格段に強く出来ました。

このように、研究は失敗や成功を基に、なぜそうなったのかを突き詰めて考え、それを生かすことよってのみ前に進みます。現在は5つめの薬を開発中ですが、その方法は変わりません。HIVを完全に取り除く治療法はなく、発症を抑えるには薬を服用し続けなければなりません。HIVが突然変異を来して、薬が効かなくなることもあります。薬が何種類開発されたとしても、それで十分ということはなく、研究を不断に重ねていく必要があります、それが私の使命だと思っています。

## 用語解説

① 逆転写酵素阻害剤、プロテアーゼ阻害剤、融合阻害剤、CCR阻害剤、インテグラーゼ阻害剤

いずれも抗ウイルス剤。HIVが体内で増殖する過程をどこかで阻害し、HIVの増殖を防ぐ。例えば、逆転写酵素阻害剤は、満屋教授が最初に開発した薬の種類であり、HIVの遺伝子の複製に関与する逆転写酵素を阻害する。逆転写酵素は、RNA（リボ核酸）を型にしてDNA（デオキシリボ核酸）を合成（逆転写）する酵素のこと。

## ② 原発性免疫不全症

先天的な要因により、免疫系のいずれかの部分に欠陥がある疾患。抵抗力が弱く、感染症やがんにかかりやすい。

## ③ 成人T細胞白血病、ヒトT細胞白血病ウイルス

成人T細胞白血病は、ヒトT細胞白血病ウイルスの感染が原因で起こる白血病の一種。日本では感染者が特に九州に多いことが、統計上分かっている。

## ④ レトロウイルス

RNAウイルスの中でも、逆転写酵素を持つウイルスのこと。ウイルスの核酸は、RNAかDNAのどちらかしか含まれず、それによってRNAウイルスとDNAウイルスに種別される。ヒトT細胞白血病ウイルスもHIVも、レトロウイルスの一種。

# 新しい方法で治療する AIDSの新薬を研究



林 宏典さん

はやし・ひろのり 熊本大学大学院生命科学研究部総合医薬科学部門後期博士課程3年。兵庫県立北摂三田高校卒業

**Q** **なぜこの分野に進んだのですか**

**A** 中学時代に大好きだった祖母を病気で亡くしたことをきっかけに、薬を作る研究者になりたいと思いはじめました。医者も考えましたが、薬ならば一度に大勢の人を治療できると考えたからです。

大学は京都大工学部に進学。薬に直結するのは薬学部ですが、より広い視野で研究できるのではないかと考え、製薬会社への就職実績もある工学部にしました。修士・博士課程

では分子生物学を専攻し、主に診断薬の研究をしました。そうした時にHIV治療薬の第一人者である満屋教授の研究室を知り、治療に直結する薬を研究できること、世界的に著名な先生の下で経験を積めることから、この研究室に入りました。

**Q** **現在の研究内容を教えてください**

**A** HIVに含まれるプロテアーゼというタンパク質分解酵素にはタンパク質を切断する機能があり、これによってHIVは成熟し、増殖することが分かっています。つまり、プロテアーゼの機能を阻害することによって、HIVの増殖を防げるのです。プロテアーゼ阻害剤は数種類がありますが、長年服用をしていると、HIVが突然変異して薬が効かなくなることがあります。そこで、今までとは違う方法でプロテアーゼの機能を阻害できないか、研究しています。

発端は、以前、研究室でダルナビルというプロテアーゼ阻害剤を開発していた時に、既存のプロテアーゼ阻害剤とは違うメカニズムでプロテアーゼを阻害できる可能性がある

分かったことにあります。私は、そのメカニズムを解明するところから研究を始め、現在は薬学部の研究者と共同で作業を進めています。

研究は、成功と失敗の繰り返しです。予想通りの結果が出ればうれしければ、原因は何かを突き詰めていくことが重要です。それが研究の醍醐味だと思います。私は工学部出身ですが、医学や薬学の研究者と一緒に研究することで視野が広がり、研究にプラスになっていると感じます。

大きな成果が得られない時は、正直に言ってしまうんです。問題に必ず正解があるとは限らず、1年研究しても5年研究しても、成果が得られないこともあります。でも、やめ

てしまえばそれで終わりです。一生懸命続けることが必要なのです。だからこそ、目的を達成した時の喜びは格別であり、やりがいを感じます。

**Q** **高校生へのメッセージをお願いします**

**A** 英語はしっかり勉強することを勧めます。研究では英語の論文を読み、学会では英語でスピーチをします。私は英語が苦手ですが、文法は頭に入っているのですが、単語がとっさに出ずに、海外の研究者と話す時に苦労しています。

また、将来の夢があり、その過程に大学があるのなら、受験勉強を一生懸命頑張ってください。まず大学に合格することが、夢への第一歩なのでから。

## 私の高校時代

### 世界が広がった 人との出会い

●2年生の時に、今でも一番といえる親友と出会いました。彼は、私とは対照的に、社交的で、友だちも大勢いて、勉強もしていましたが、遊ぶのが好きでした。彼が何かという私を外に連れ出してくれたおかげで、人見知りしやすい私でもたくさんの人と出会い、人間性が豊かになったと思います。内に閉じこもらず、多くの人と知り合いになることは大切です。

また、研究者になりたいと思っていた私は、3年間、勉強に一生懸命打ち込みました。大学に入って分かりましたが、高校までの学習は広く浅いものであり、大学でより深く学んでいきます。私は教科書を読んでいても疑問に思うことがかなりあったのですが、大学の授業でそれらの疑問は解消されていきました。「なぜこんなことを学ぶのか」と疑問に思うことがあるかもしれませんが、高校での学びは大学での研究の土台となるものなのです。

# 言語活動の充実を授業の中でどのように取り入れるか

新課程では、各教科・領域での「言語活動の充実」が明示されている。

しかし、授業で具体的に何をどのように工夫すればよいのか、明確になっていない学校は多い。

今号では、「総合的な学習の時間」を軸に、授業の中で言語活動を工夫している三重県立神戸高校の取り組みを紹介する。

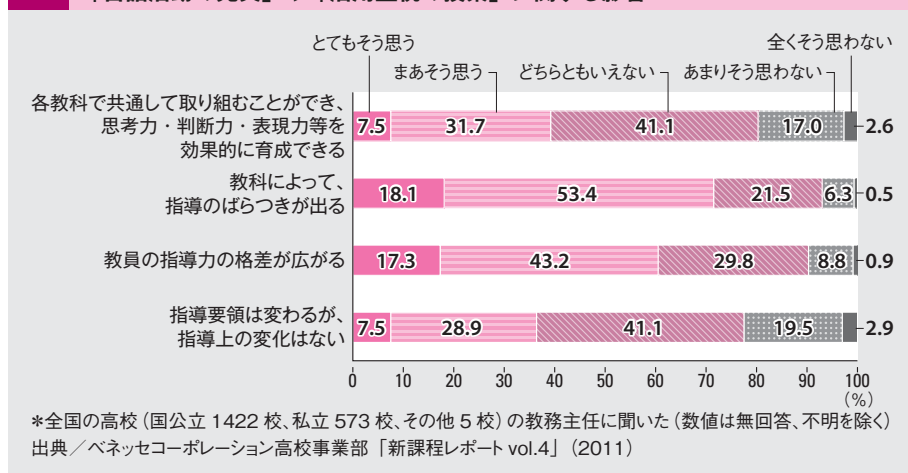
「言語活動の充実」は  
思考力などの育成につながるのか

新課程では、生徒の思考力・判断力・表現力などを育む観点から、基礎的・基本的な知識及び技能の活用を図る学習活動が重視されている。そして、言語に対する関心や理解を深め、言語に関する能力の育成を図る上で必要な言語環境を整え、生徒の言語活動を充実することを明示している。

しかし、調査データによると、言語活動の充実や活用を重視した授業が、思考力・判断力・表現力を効果的に育成できると捉えている教師は少なく、「教科によって指導のばらつきが出るのではないか」「教員の指導力の格差が広がるのではないか」と懸念している教師は多い(図)。

論理や思考といった知的活動の基盤であると共に、コミュニケーションや感性、情緒の基盤となる言語力を

図 「言語活動の充実」や「活用重視の授業」に関する影響



育てる活動を、各教科、領域の中で効果的に取り入れていくにはどうすればよいのだろうか。

次ページから、三重県立神戸高校が「総合的な学習の時間」や教科学習で行っている言語活動について紹介する。

三重県立神戸高校

本質を問うテーマのグループワークで  
論点をつかみ、要約する力を育てる

進路学習と関連付けながら  
「表現力」を育成

三重県鈴鹿市に位置する三重県立神戸高校は、2011年度、2年生で言語活動の充実に向けた取り組みに着手した。同校は1コマ45分×7時間の授業を実施しており、毎週水曜日の6時限目にある「総合的な学習の時間」（以下、総合学習）と、7時限目のLHRを活用し、年9回の「表現トレーニング」のプログラムを組んだ。

「志望理由書を書く」ことを最終目標として、「学ぶことの意味」「論理」「コミュニケーション」「働くことの意味」「科学技術」といっ

たテーマを設定して授業を進めた。その理由を、当時2年生担任で活動を主導し、現在1年生主任で国語科の今田美千代先生は、次のように説明する。

「この時期の高校生は、第三者に自分の考えや感情を出すことがなかなかしません。そこで、テーマは生き方や人とかかわりなど、2年生で進路を具体的に決めていく時期にこそ考えてほしい、人としての本質を問うような内容としました。自分にとって必要と感じ、感情移入できるような内容であるからこそ、深く読み取ることができ、自分の考えを伝えたい、表現したいと思うものです。」

例えば、『働くことの意味』では、普段の授業であまり発言しない生徒が、生き生きと自分の考えを発言していました。『表現トレーニング』は、表現力の育成だけでなく、進路学習や人権学習など他の活動とも連動させました。

毎回の活動は、テーマに即した課題文を読み、生徒個々で要約や意見の記述などの問題に取り組み「個人ワーク」と、課題文やテーマについて4〜5人で話し合う「グループワーク」をバランスよく配置した。教材は、ベネッセの「表現サポート」(\*)を土台とし、自校の生徒の実態に合わせて実施時間を増やしたり、順番を変えた



三重県立神戸高校  
今田美千代  
いまだ・みちよ  
教職歴25年。同校に赴任して8年目。1学年主任。国語科。

三重県立神戸高校

◎2012年度で創立92周年を迎えた伝統校。授業を1コマ45分の7時限とし、学習指導の充実と特別活動の活性化を図る。◎全日制/普通科/理数科/共学/1学年約320人  
◎2012年度入試の合格実績(現浪計)/国公立大は、東北大、名古屋大、三重大などに96人が合格。私立大は、中京大、南山大、同志社大、立命館大、関西大などに延べ616人が合格。

りするなどの工夫をした。

「大学の志望理由書を書く授業では、実物の推薦入試の出願書類を活用しました。実際の出願を想定して書くことで、より真剣に取り組ませたいと考えたからです。書いた志望理由書は、新3年生の担任団に渡して進路資料にしてもらうことも伝えました。授業中に書き終えられなかった生徒もいますが、提出期限を聞いてくるなど、狙い通りに生徒は真面目に考えていました」(今田先生)

副担任が活動を進める体制とし  
教師全員で指導に当たる

活動は副担任が中心となって進

\*ベネッセコーポレーションの低学年向け小論文・表現学習教材。書くことを通じて、高校生の「考え、伝える力」を育成することを目指している

図1 2011年度「表現トレーニング」第5回の指導案

2年生総合学習指導案 (12月7日)		
<p>Q 本時のテーマ ……「働くことの意味」 (題名) 「きみはなんのために働きたい？」 (指導目標) ・社会人の声などを通じて、働くことに対するイメージをつかむ。 ・自分は将来働くうえでどんなことを大切にしたいかを考える。</p> <p>Q 準備物 ・表現トレーニング教材: 「表現トレーニング2」(P28~31) 「高校生の論点」(P26~29)</p> <p>●グループワークについて ・4人程度で机を合わせてグループを作る。(近くの席の生徒同士でよい) ・グループの進行役を決めておく。(出席番号が早い生徒、右前方の生徒など) ・留意事項: 思いついたことは積極的に発言する。 友達の意見は尊重する。最後まで聞く。 話し合いのテーマから外れないように注意する。</p>		
○展開		
内容	詳細	教材/備考
導入 (8分)	Q1・2: 個人ワーク (計6分) ①仕事を通して得たいものとその理由を書く。 ②『高校生の論点』P26を読み、気づいたことなどを書く。	Q2 = 「共感シール」の利用
展開 (30分)	③ Q3: 個人リナ (5分) 『高校生の論点』P27の社会人の声を読み、印象に残ったところ等を書く。 ④ Q4: グループワーク (5分) 4人ぐらゐのグループで、Q3で書いた内容を共有する。 ⑤ Q5: 個人ワーク (10~15分) 『高校生の論点』P28~29を読んで、ワークに取り組む。(メインのワーク。時間は多めに。) ⑥ Q6: グループワーク (5分) → Q5での意見を共有する。(時間が足りなければ割愛可。) ⑦ Q7: 個人ワーク (5分) 読んで、ワークに取り組む。	Q4 = 友達の意見をメモする。 Q5 = ワークで意見があまり出なかった場合、「朱入りガイド」の解答例を紹介する。 Q7 = ここで玄田さんの言う「自分探し」は、「自己理解を深めていく」ことであることを補足する。
まとめ (5分)	⑧ Q8: 個人ワーク (5分) これまでのワークも踏まえ、働くことについて考え、記入する。	Q7 = ここで玄田さんの言う「自分探し」は、「自己理解を深めていく」ことであることを補足する。 時間があれば、P31の「まとめ」の欄に感じたことを書く。
<p>* 冊子「表現トレーニング2」を回収し、検印を押しておく。</p> <p>* 「表現トレーニング」P32・33『高校生の論点』P30・31 委 尚中「協働力」より)の「発展」にも取り組んでおくと良い。</p> <p>★ 「発展」に取り組む、冬休み前までに提出する人は、<b>連絡してください!</b> (提出先: )</p>		

指導案は教科指導と同じように進行の順序と所要時間などを示し、グループを作るポイント、活動中に生徒に伝えてほしいことなども入れて、副担任が戸惑わずに進行できるようにしている \*学校資料をそのまま掲載

め、担任がサポート役となる体制とした。担任の負担軽減になると同時に、言語活動を全教師で行い、その意識を浸透させるためでもある。

指導案は、「表現サポート」の教師用資料を基にして、各回分を今田先生が作成した(図1)。活動を進める際、副担任が迷うことがないように、活動の手順をきちんと説明し、生徒への声掛けが必

要な場合や声の掛け方などを具体的に示した。同じ教材を使ってもクラスによって進度は異なるため、授業内に終わらせてほしい工程も指示しておき、出来なかった部分は宿題にすることとした。

「言語活動は、国語科の教師でないと指導できないのではないかと考える方もいます。どの教師も抵抗感なく、無理なく実施できるように、指導案はA4判1枚に簡潔

にまとめ、指導案通りに進まなかった場合の対処法も明記しました。また、授業後には先生方に行具合などを聞き、次回に向けての改善点を探っていきました(今田先生)

**最後まで諦めず  
粘り強く書く姿勢が身に付く**

1年間の活動の成果として、今田先生は生徒の書く姿勢が変わった点を挙げる。

「前年度は小論文模試を2回行いましたが、時間内に書き終えられなかった生徒は、2年前前に行った小論文模試の時よりも少なくなりました。また、3年生となった本年度に行った小論文模試でも、生徒は最後まで粘り強く書いていたと3学年団か

ら聞きました。生徒の書くことへの抵抗感は薄れたようです」

また、年度末に生徒に行った総合学習の評価アンケートでは、心に残った活動に「表現トレーニング」を挙げた生徒は6割に上った。その理由について、生徒がグループワークを面白いと感じているからではないかと今田先生は話す。

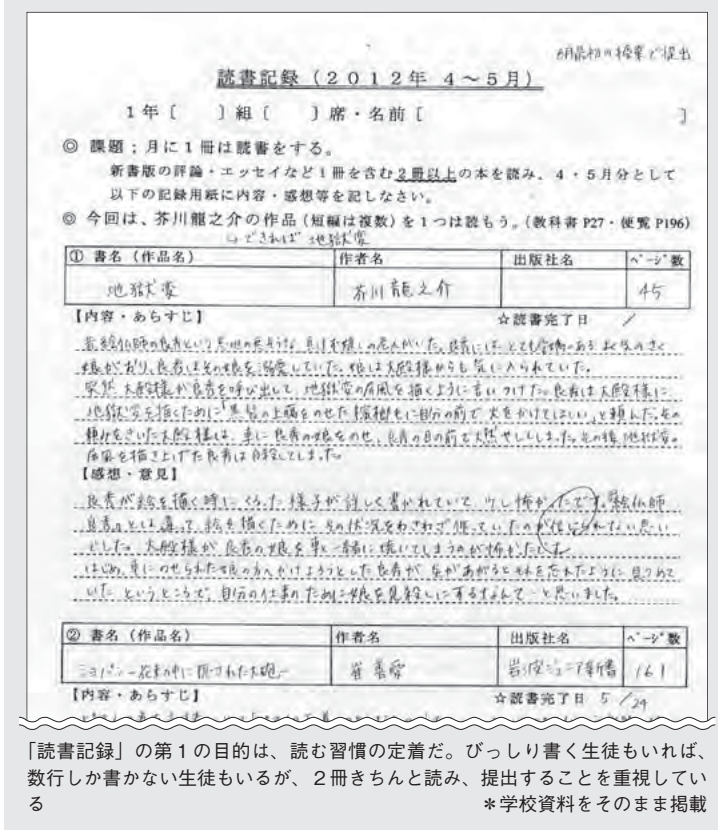
「生徒の友人関係は意外に狭く、クラスに40人いても親しく話すのはほんの数人です。同じ教室で授業を受けているけれども普段は接点のないクラスメイトとグループを作ること、対話の機会を提供すると共に、仲間がグループワークで意見をうまく発表したリ、物事を深く考えていたりする姿に、生徒は自分も頑張らなければと触発されているようです」

**考える、話す、書く活動を  
授業に少しでも取り入れる**

12年度は、今田先生が学年主任を務める1年生でも、総合学習とLHRの時間に全5回の「表現トレーニング」を行う。

「前年度の2年生の成果を受け

図2 1年生の「読書記録」記入例



て、新1学年団に同様の活動を提案したところ、教師全員の合意を得て実施することになりました。「こうした活動は小学校から実践すべき」との声もあり、言語活動に課題意識を持っていた先生が多くなりました。1年生では、筆者の意見と、それを補強する具体例や根拠をつかめるような、読解力と要約力の育成が中心になります」

今田先生は、担当する国語の授業でも、言語活動を意識した取り組みを始めた。その1つは「読書記録」だ(図2)。2カ月に2冊の本を読み、内容の要約と意見をまとめる。1冊はその時の授業に関連した本を、2冊目は新書を奨励している。また、古文の授業では、登場人物がなぜそのような行動を取ったのかを問い掛け、周りの生徒と話し合わせる活動を行うようにした。

「読書記録」の第1の目的は、読む習慣の定着だ。びっしり書く生徒もいれば、数行しか書かない生徒もいるが、2冊きちんと読み、提出することを重視している \*学校資料をそのまま掲載

「新課程で言語活動の充実が盛り込まれたこともありですが、『表現トレーニング』での生徒の様子を見て、教科指導でも考える場面や話し合う場面を意識して取り入れるようにしています。生徒が教師の話聞いて理解するだけでなく、能動的な活動を積極的に取り入れることによって、生徒の授業内容への理解は更に深まり、授業への関心が高まると感じています」

こうした動きは、他教科にも広がりつつある。現代社会では、定期考査で毎回200字程度の論述を出題。1年生のあるクラスは、金曜日を「作文の日」として、2週に1回のペースで、その週の出來事を題材とした作文を原稿用紙1枚に書く活動をしている。

「言語活動の充実とまではいなくても、『考える』『話す』『書く』などの活動は、国語だけでなく他教科でも、授業にちよつとした工夫で取り入れることは可能です。この積み重ねが、生徒の授業態度を受け身なものから主体的なものへと変化を促せるのではないかと期待しています」

**「論点を把握する力」の土台を育成する**

言語活動をさまざまな教育活動に取り入れ始めた神戸高校。高校での目標を、どのように捉えているのだろうか。

「どんな話でも文章でも、論点に気付けば筆者の意見とその理由も整理できます。しかし、社会に出れば話は1回限りで、授業のように何度も課題文を読む機会はありません。高校では、瞬時に論点を把握できる力の土台を作り、大学での学びに橋渡しが出来ればと思います」(今田先生)

講演や模擬授業の後に内容を要約させる活動も検討している。

「同じ話を聞いたとしても、重要となるポイントは人によってさまざまです。スキルを身に付ける場として模範解答がある『表現トレーニング』などで練習をし、そのスキルを実践する場として、講演や模擬授業などを受けて、自分にとって良かったポイントをまとめさせるような活動を出来ればと考えています」(今田先生)

テーマ 再編・統合からの学校づくり

# 教師と生徒が当たり前を徹底した時 2つの高校から「特別な高校」が生まれた

遅刻数ゼロへ——鳥取県立倉吉総合産業高校「学校再編からの挑戦」

## 進む学校再編と、生じる課題

高校の生徒数は、1989年の約564万4千人をピークに、減少の1途をたどり、現在までに高校は500校近く減少した。高校教育について、重点的に取り組んでいる課題として「再編・統合」を挙げている自治体は、47都道府県中30にも上る（\*1）。社会環境の変化の中で、高校再編・統合の流れは不可避の状況だろう。とはいえ、異なる文化を持つ複数の高校が実際に1つの高校としてまとまり、新たな存在感を示すことは容易ではない。

今号では、産業高校と工業高校が再編され、工業、商業、家庭、情報の4学科を持つ総合選択制の高校として設立された倉吉総合産業高校の10年間の歩みを紹介する。独自の文化を育んできた2校が、再編によって「地域が誇りとする新たな高校」へと変貌をとげるまでの、教師たちの挑戦の日々を振り返る。

\*1 文部科学省「高等学校教育の改革に関する推進状況」（平成23年度版）より

	1989年	2012年	
高校数	5,511校	5,022校	▲
高校生徒数	564万4千人	335万6千人	▲

出典／文部科学省「学校基本調査」

卒業生の6〜7割が県内の企業に

就職する倉吉総合産業高校（以下、倉総産）では、地域に貢献できる人材の育成に力を注ぐ。第三代校長の

竹ノ内誠一先生は「技術や知識も大切だが、何より人間性の向上が不可欠」と教育活動の根幹を語る。事実、同校の生徒は地域では「大きな声であいさつする」「遅刻をしない」「服装の乱れがない」と評判が高い。県内の企業からも「しつけが行き届き、安心して採用できる高校」と評価され、優れた就職実績を上げている。

だが、今日の学校像は、教師たちの不断の努力で創り上げられたものだった。それは、教師自身が厳しく自分のあり方を問い直し、妥協なき学校改革に取り組んだ賜物なのだ。

学校改革のスタート

## 再編を機に

## 共通の価値を追求する

同校の今を知る者が、もしも創立当時の校内を歩いたなら、きっと別の高校だと思うだろう。スカートを短くした女子、ズボンをずらした男子が散見され、遅刻者も1日10人以上。始業時間になって教壇に立った教師を前に「ちょっと待ってて！」とパンを口に押し込む生徒……。再編前の2つの高校は、資格取得や就職でそれぞれ一定の評価を得ており、多くの卒業生が県内で活躍していた。だが、2校の生徒が同じ制服で同じ校舎に通うようになった時、



校長  
**竹ノ内誠一**  
たけのうち・せいいち  
教職歴31年目。同校赴任歴1年目。理科。



副校長  
**福井吉宏**  
ふくい・よしひろ  
教職歴34年目。同校赴任歴3年目。数学科。



教頭  
**小林幸平**  
こばやし・なほひろ  
教職歴25年目。同校赴任歴6年目。商業科。



機械科主任  
**土井康弘**  
どい・やすひろ  
教職歴21年目。同校赴任歴10年目。工業科。



電気科主任  
**橋井洋樹****はしい・ひろき**  
教職歴21年目。同校赴任歴10年目。工業科。



ビジネス科主任  
**百本享介**  
ひやくもと・きょうすけ  
教職歴21年目。同校赴任歴9年目。商業科。



生活デザイン科主任  
**横河紀子**  
よこがわ・のりこ  
教職歴21年目。同校赴任歴4年目。家庭科。



情報科主任  
**北野弘**  
きたの・ひろし  
教職歴30年目。同校赴任歴10年目。情報科。



教務主任  
**竹歳真一**  
たけとしんいち  
教職歴21年目。同校赴任歴2年目。数学科。



生活指導主任  
**山本清人**  
やまもと・きよこ  
教職歴30年目。同校赴任歴8年目。体育科。



進路主任  
**藤本朗**  
ふじもと・あきら  
教職歴22年目。同校赴任歴8年目。工業科。



3学年主任  
**長尾美都子**  
ながお・みつほ  
教職歴28年目。同校赴任歴8年目。国語科。



2学年機械科担任  
**岩野竜一**  
いわの・りゅういち  
教職歴15年目。同校赴任歴10年目。地歴科。

**鳥取県立倉吉総合産業高校**

- ◎設立 2003 (平成15) 年
- ◎形態 全日制/工業学科(機械科、電気科)、商業学科(ビジネス科)、家庭学科(生活デザイン科)、情報学科(情報科)/共学
- ◎生徒数 1学年約190名
- ◎12年度入試合格実績 国公立大は、佐賀大、島根大、豊橋技術科学大に3人が合格。私立大は、大東文化大、拓殖大、徳山大などに13人が合格。短大は14人、専門学校には49人が合格。就職は、一般企業93人、公務員1人。
- ◎住所 〒682-0044 鳥取県倉吉市小田204-5
- ◎電話 0858-26-2851
- ◎Web Site <http://www.torikyo.ed.jp/sousan-h/>

誰も予想できなかったほど、生徒たちは落ち着きを失った。

当時、同校では既に10分間の朝読書を実施していた。静かに本を読むことで、落ち着いた気持ちで1時間目の授業を迎えようとしていたが、これも実態は狙いからかけ離れたものだった。当時を知る教師が「廊下をうろつき、おしゃべりしている生徒たちに、拡声器を使って『席に着きなさい!』と呼び掛けていた」と振り返るように、静かに読書が出来る状態ではなかった。

だが、ざわつく校内にあつて、黙々と読書続けるクラスがあった。工業学科電気科のクラスである。実習で機械・器具を使用することが多い電気科は、普段から教師の指導が厳しく、朝読書にも物音一つ立てることなく取り組んでいたのだ。

当時の倉総産は、学科ごとに前身からの文化があり、「校内に複数の高校があるような雰囲気だった」と再編直後の草創期を知る教師たちは口をそろえる。それでも当初は、「2校の良いところをそのまま残していけば、それが倉総産の文化になる」と考えていたという。だが、実際に

はそれぞれの学科の教育方針や、歴史の中で積み上げてきたプライドがぶつかり合い、倉総産としてまとまることが難しかった。期待とはうらはらな現実を前に「この再編は失敗だったのではないか」と、職員室でふと教師がこぼしてしまう、そんな状況まで追い詰められていた。

これまでのように各学科が資格取得や就職で努力するだけでなく、教師全員が共感できる学校共通の価値を見付け、一丸となって追求しなければならぬのではないか。それが出来なければ、各学科が培ってきた長所を共有することも出来ない——1期生が卒業する頃、教師たちはそう強く意識し始めていた。

**改革コンセプトの確立**

**妥協なき**

**生活指導を徹底**

各科の教師が「倉総産としての共通の価値」を強く求め始めた頃、初代校長はさまざまなキャリアの教師に個別に声を掛けていた。「科だけではなく、学校としての魅力を追求

## 生徒から嫌われてもいい 全員を敵に回しても、オレはやり抜く

したい」と自身の思いを語り、教師からは現状に対する思いを聞いた。

「普通科志望の中学生が増える中、このままでは地域の人たちが『倉総産には子どもを行かせたくない』と思うようになる……。校長とは学校存続への危機感を持って何度も語り合いました」（山本清人先生）

初代校長が学校改革の根幹に据えようとしたのは生活指導だった。そして「私が全ての責任をとるので、好きなようにやってほしい」と、山本先生を生活指導主任に任命した。

「校長には『じゃあ、本当に好きないようにやります』と返事をしました。そして4月の全校集会で、私は生徒に『服装、頭髮違反は今後一切許さない。化粧もダメだ。きみたち全員を敵に回しても、オレはやり抜く』と宣言したのです」（山本先生）

生徒は「一体何言ってるの？」と怪訝な表情だったという。だが、その言葉は真実であり、その日から生活指導部の指導に妥協はなかった。

化粧をしてきた者は落としてからでないで教室に入れなかったし、服装に違反のある者は自宅まで直してからでないで登校を認められなかった。

「違反に気付いたら、校内であろうが駅前であろうが、絶対に見逃さずに生徒に声を掛けました。オレたちはもう生徒に嫌われたっていい。そう思いながら、生活指導部として指導を徹底しました」（山本先生）

違反を自宅で正してくるように言われた生徒の中には、登校せずにそのまま欠席してしまう者もいた。「子どもが学校から帰ってきたがどうなっているのか」と保護者からの問い合わせの電話も相次いだ。そうした保護者には校長自らが応対し、「地域から愛され、企業から一緒に働きたいと思ってもらえる生徒を本校は育てたい」「今のままで社会に受け入れられると思うか、家庭でもぜひ子どもと話をしてみしてほしい」と学校としての思いを丁寧説明した。朝読書にもメスが入れられた。生

活指導部が「落ち着いた1日のスタートのために教師全員がかかわるべき指導」と徹底を呼び掛けたのだ。「国語科や司書教諭の仕事」という意識が払拭され、学校全体の取り組みとして受け入れられるきっかけになったと、当時、図書委員会を担当していた長尾美都子先生は言う。

「そこで私は、各クラスの図書委員の生徒に、朝読書で着席しなかった生徒の数を毎日担任に伝えてもらいました。『今日はこれだけ座っていませんでした』と生徒からクラスの実態を報告されれば、きつと動いてくれるはずだと、それぞれの先生の感性に期待しました」（長尾先生）

### 成功への分岐点

#### 生徒よりも

#### まず先に教師が変わる

だが、教師は最初から一枚岩ではなかった。指導の変化に生徒が戸惑ったように、「何もそこまで……」という表情を見せる教師もいた。

「服装の乱れを指導している時、そばにいた他の先生が『怒られ

ちゃったね』と生徒に笑い掛けてしまうようなこともありました。同じルール、同じ態度で生徒に指導することは決して簡単ではありませんでした」（岩野竜二先生）

生活指導の厳しさが必ずしも一致しない中で、生活指導部が同僚たちに求めたのは「生徒への徹底」ではなく、「自分自身への徹底」だった。「生徒に『社会で信頼されるためには、かくあるべきだ』と教える以上、教師が社会人としての範を示す必要があった」と山本先生は説明する。

「生徒に5分前着席を呼び掛けるなら、自分たちが5分前に教室に行くべきだし、整理整頓を言うのなら、自分たちも机の上を片付けようと言いました。生徒は教師を映す鏡であり、自分たちが変わらなければ生徒は変わらない」（山本先生）

教師の意識は徐々に変わり始めた。集まりに遅れた若手教師が「そんなことで生徒を指導できるのか」とベテランから叱責されることもあったという。顔色を失うほど叱られたその教師は、後日、学年通信の中で「私の遅刻によって、多くの先生の大切な時間が無駄になった」と



◎同校の遅刻数は、5年間で25分の1にまで激減した。生徒玄関前には毎朝3人の教師が交代で立ち、あいさつと服装の指導を行う。学校としては「始業5分前着席」を指導しているが、3年生は「1分前に教室に入っていないと居心地が悪い」と話す



◎同校の1日は朝読書で始まる。生徒はもちろん、教職員も全員が朝読書に取り組む。また、外部からの電話も、緊急の連絡以外は取り次ぎを行わないようにしている。そのため、朝読書の10分間、校内は物音一つしない静寂に包まれる

自身の失敗を生徒に書きつづった。校内でのあいさつも、教師から率先して行うようにした。

「自分が意識して生徒にあいさつをするようになると、大きな声でしっかりとあいさつできない生徒が本校にいかにも多いのか、実感しました。こちらがあいさつをしているのに返事がなければ、もちろんよい気分はしません。でも同時に、これが現実なのだと分かったのです。だから、返事が少なくても私たちはあいさつを続け、授業やHRであいさつ

を習慣付けておくことの大切さを共有していきました。生徒の実態に気が付かないままだったら、そうした指導も行うことがなかったでしょう」(土井康弘先生)

教師自身が範を示すことで、「時間に余裕を持って行動すれば、良い仕事ができる」「普段から心掛けていないと、いざという時に失敗する」など、学校の指導の意味を自分の体験を交えて語れるようになった。自ずと「ダメだ」「しなさい」という頭ごなしの指導が減った。

## 生徒に5分前行動を求めるとなら教師がまず5分前行動を示すべきだ

「『おはよう』とだけ言われるのと、『〇〇くん、おはよう』と言われるのでは、どちらが気分がよいかは明らかだよ。じゃあ、社会に出た時、どちらのあいさつが出来る人が、上司やお客さんから話を聞いてもらえると思う？ など、マナー一つでも具体的に説明します。生徒は、社会で求められる人材像がイメージで

きますし、そうした言葉を職員室や廊下で他の教師が耳にすることで、育てたい生徒像を共有し、学科を越えた学校全体の育成像をつくりあげられたように思います」(長尾先生)

教師が生徒の模範となることを徹底し、生徒へ根気よく声掛けを続けることで、教師が本気で学校を変えようとしていることが生徒に伝わっ

ていった。そして次第に、身だしなみやあいさつの仕方など、教師から日常の細かなところまで指導されることを、生徒は喜びとして受け留められるようになっていった。

「生徒の中には、褒められる経験が少なく、自分に自信が持てない者もいます。そうした生徒にとって、教師が丁寧に指導し変化を褒めることは、『自分に期待してくれている』という自己肯定感につながります。それは生徒にとっての『自慢の学校』となる第一歩です」（小林幸平教頭）

化粧をやめた生徒が「今までは情性で周りに合わせていたが、それをやめたら気持ち became なった」と自ら教師に語ることもあったという。そうした生徒の変化が、教師をより生徒に向き合わせていった。

「実際に生活態度が改善していく生徒を見ることで、教師自身が『自分たちがしっかりと指導すれば、生徒はこんなに変わるんだ』ということに気付き、やり甲斐を感じるようになったのだと思います」（山本先生）

生徒は変わるチャンスを求めている。教師が本気で指導を徹底すれば生徒は変わる……取り組み2年目に

## 指導を徹底すれば生徒は変わる それを知ることが教師のやり甲斐になる

は教師たちは確信していた。そしてその頃には、朝読書の時間、校内から一切の物音が消え去っていた。

### 取り組みの成果

## 遅刻数は 25分の1に激減

続いて、同校では遅刻ゼロを目指す。25分の1に激減した取り組みを開始する。08年度より、生徒玄関に専用のホワイトボードを置き、月ごとの遅刻回数をクラス単位で表示するようにしたのだ。また、交替で毎日3人の教師が生徒玄関前に立ち、あいさつと服装の指導を開始。さらに2学期の始業日には、夏休みからの切り替えを促すため、約80人の教職員全員が玄関前に整列し、生徒を迎えるようにした。そして、遅刻した生徒は担任または副担任、学年主任、生活指導主任の3人に「遅刻届」を提示し、押印と共に指導を受けることになった。

取り組み初年度から教師が遅刻の目標数値（遅刻回数を何回以下にとどめるか）を生徒に提示する形を取り、遅刻回数は着実に減少した。取り組み前に学校全体で年間2200回あった遅刻回数は、11年度には86回と25分の1にまで激減している。

今、同校では始業7分前になると生徒は急いで教室に向かい、5分前には登校する生徒の姿は見えなくなってしまう。特に3年生は「余裕を持って朝読書を始めよう」と、生徒が自主的に始業10分前入室を徹底する。やれば出来ることに自信を持つた生徒が、自らさらに高い目標を掲げるようになったのだ。

教師総出のきめ細かな指導は、学校改革開始から7年が経った今も変わらない。学年集会などで行われる身だしなみの検査は、ハンカチの柄や爪の長さにも及ぶ。「就職の面接の時に、マンガの絵が入ったハンカチを持って行ったら、企業の人はどう思うだろう?」「普段から清潔

にしていないといざという時に忘れてしまうよ」などと、一人ひとりの生徒に「日頃から気を付けなければいけない理由」を説明する。そして、改善を求められた生徒はやはり複数の教師の元を訪ねて、チェックを受けなければならぬ。

「1年生の時は先生がうるさいから従うという感じですが、2年生になるとそうしなければいけない理由が分かるため、言われなくても出来るようになります。こうなると教師も集会などで単なる注意事項を説明する場面が減ります。その分、進路に関する話などが出来るようになりますから、厳しい規範の中で生徒の個性を伸ばす指導に時間を掛けられるようになるのです」（小林教頭）

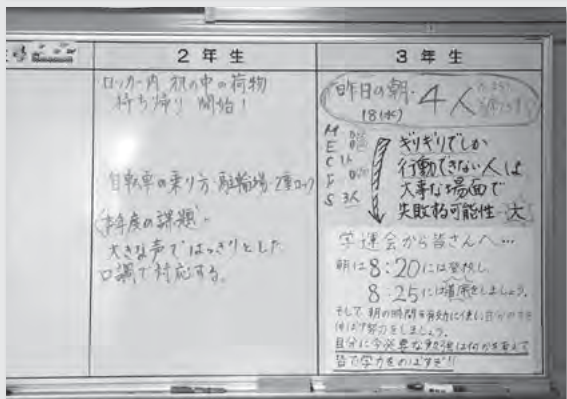
かつて、同校の教師は「今の高校生は何度言っても出来ない」と考えていた。だが今は「10回では伝わらないが、100回言えば必ず伝わる」が教師たちの合い言葉だ。

諦めずに繰り返すのは教科指導も同じだ。同校の校内テストは、多くの教科において合格点に到達するまで再テストが繰り返される。

「やっと合格点に達した時、生徒



◎3年生の学年集会。ここでも5分前集合が徹底されている。3年生になると整列状態などを生徒同士で注意し合うようになる。この日の集会後、抜き打ちで身だしなみの検査を実施。担任、副担任から指摘を受けた生徒は、生活指導主任に名前と違反内容を報告する



◎生徒玄関に置かれている「遅刻者数調査一覧」に、月ごとの遅刻回数をクラスごとに表示する。職員室前の廊下には、各学年で管理する掲示版が。3年生になると、生徒が自主的に時期に応じた行動目標を掲げ、仲間と呼び掛けるようになる

## 「生徒が悪い」ではなく 「生徒にそうさせる教師が悪い」

は大きな達成感を味わいます。生徒に自信を持たせることも、指導を徹底する目的です。厳しい指導の徹底は『きみなら出来る』と教師が生徒を信じているから可能であり、信じられていくことが分かるから生徒は耳を傾けます。だから、本校では『生徒が悪い』ではなく、『そうさせる教師が悪い』なのです。これだけ教

師が同僚や先輩に叱られる学校は珍しいと思います」(竹歳真一先生)

教師たちが感じる課題

## 厳しい指導の意味を 生徒は理解しているか

教師たちは生活指導の徹底の成果

を認めながら、しかし現状に決して満足はしていない。

「確かに遅刻や欠席の数は減り、あいさつも出来るようになった。校内は本当に落ち着きました。しかし、そのこと自体はあくまで手段です。なぜ遅刻をしないといけないのか、その理由を生徒が真に理解したのなら、授業の受け方や家庭学習の取り組みはもっと変わらなければいけません。見た目が改まるのはとても大切ですが、それは本質ではない。遅刻をしなくなって自分の何が変わった

たのか、私たちは生徒に問い続けなければなりません」(北野弘先生)

前年度から275日間連続(9月7日時点)で遅刻者ゼロを続け、生徒玄関にあるホワイトボードで「日本一」と讃えられている2年生機械科クラス担任の岩野先生も、「素晴らしいことではあるが、本音としてはどうでもいいこと」と言い切る。

「遅刻数ゼロの記録自体に実はあまり価値はありません。まして、怒られるから、記録が途切れるからといった理由で遅刻をしないのだとし

たら生徒は成長していないのだと思います。遅刻だけでなく服装やあいさつも、先生に言われるからではなく、高校生活を充実させるための当たり前前のことであり、社会に出た時に生きてくるからだと納得した上で取り組んでほしい。だから私は上辺の変化にとらわれず、『高校生活に全力を尽くしているか』を常に問い掛けたいのです」(岩野先生)

「遅刻数ゼロ」の記録をまた1日伸ばしたこの日の朝、岩野クラスでは朝読書の時間が急ぎよHRに振り替えられていた。「きみたちは、先生の顔色を見ながら、授業態度を決めていないか?」「怒られなければいいという考えは、自分の生き方を他人に委ねている。これからもそんなふうに生きたいのか?」。抑えた、しかし力強い岩野先生の声だけが校内に響いていた。

### 次のステージへ

## 大きな夢を見付け 自ら動く生徒を育てる

同校は今年度、創立10周年を迎え

た。「倉総産の生徒」であることに胸を張る生徒たちは、課題研究などの取り組みを通して地域ともこれまで以上に結び付きを深めている。

「例えば、電気科では独居老人の自宅を訪問し、電気器具の点検・交換を行っています。これは地域の電業協会の協力によるものです。製図実習などにも参加いただいており、生徒を地域全体で育てようとしてくださっていることを実感します」(橋井洋樹先生)

「ビジネス科では、協力企業商品や本校生徒がデザインした商品などを販売するチャレンジショップを運営しています。地域の人々にさらに生徒を理解していただくチャンスですし、活動を通して地域に信頼されれば、生徒は自分に自信を持つことが出来る。自己肯定感を高めて地元で暮らすことが出来れば、その時こそ真の地元愛が生徒の内面に生まれるはず」(百本享介先生)

進路主任の藤本朗先生は「生活態度が落ち着いたことが、学力の向上にもつながっている」と評価する。

「2年生、3年生いずれも新年度開始直後の学力テストで成績の改善

## 遅刻しないことが目的ではない 大切なのは高校生活に全力を尽くすこと

が見られます。進級前の0学期に出された課題にきちんと取り組むようになった成果でしょう」(藤本先生)

生活指導を徹底して土台をつくりあげた今、「ジャンプアップの時期が来た」と教師たちは語る。

「教師が見逃さずに指導を徹底する状態から、生徒が自分で考えて行動できる状態になるか。その原動力として、自分でやりたいことを見付け、それに向けてどう動くべきかを考えられる自主性の育成が今後のテーマだと思います」(横河紀子先生)

最近の生徒は、「倉総産に行けば大丈夫」と安心しているようだ。教師たちは感じていこう。それは高校に対する信頼感であると同時に、「先生の言うことを聞いていれば大丈夫」という甘えもあるのではないかと、教師たちは危惧している。

「どの教師も同じ指導を行うから、生徒は教師を分け隔てなく信頼し、安心して登校することが出来ます。しかし、私たちはいつまでも彼らの

そばにすることは出来ません。教師の元から離れていっても、自分で考えて行動できる力を身に付けさせたのです」(福井吉宏副校長)

今、同校の教師たちは事あるごとに「言われなくても出来ているか」「将来を考え、自分が何をすべきか考え、行動しているか」と生徒に問い掛ける。集会では「出来ている」と思う生徒に拳手を求め、まだ多くはないその人数を確認し、進行役の教師が「この状況をどう思いますか?」と同僚教師に自覚を促す。

生徒の可能性を最大限広げるために、資格試験対策や就職支援に加え、普通教科の教師が中心となって大学入試への意識向上も図っている。

「数学の授業では、『この解法は岡山大の入試でカギになった』など、日々の授業と入試のつながりを意識して話しています。授業を大切にすれば国立大合格も夢ではないこと、自分にはその可能性があることに気が付いた生徒が、『国立大に挑戦し



◎もともと資格・検定試験の合格率や就職実績は優れていたが、生活指導が徹底されたことで、授業態度はさらに落ち着いた。「真の学力は、心が育たないと身に付かない。だから、本校の指導は専門学科だけでなく、普通科でも必ず通用する」と教師たちは確信する



◎担任と部活動顧問の連絡が密であることも同校の特長だ。「○○は今日はクラスで落ち着きがなかった」など、担任から生徒の様子が伝えられるので、担任と顧問が同じ目線で指導できます。部活動が人間教育である以上、担任との連携は不可欠です」(野球部顧問)

たいので、添削指導をしてほしい』と自ら申し出てくるようになりまし  
た」(竹歳先生)

生徒の多様化が進む中、生活指導  
は今後さらに重要になってくること  
は、どの教師も十分に分かっている。

「中学生を『倉総産生』に変える  
のに1年かかります。つまり毎年ゼ  
ロからのスタートなのです。今の評  
価に安心していては、元の学校に  
戻ってしまう……そうした危機感が  
あるから、先生方は変わることなく  
本気の指導を続けています。実は私

は、前任の第二代校長をよく訪ねて、  
話を聞かせてもらっています。どう  
すれば『当たり前のこと』をここま  
で徹底できるのかは、1日や2日の

引き継ぎで分かるものではありませんし、  
んし、どういう思いで多くの先生方  
が団結したのかを私が理解しない  
と、学校として次に進めないと思っ  
からです。今の校風を倉総産の文化  
として根付かせながら、生徒の自主  
性を育てられるか。2つの高校が再  
編され、真に特別な高校になれるか  
が問われています」(竹ノ内校長)

\*

ある夜、宴席で一人の若手教師が  
言った。「明日の全校集会で、遅刻  
回数目標値を生徒に決めさせませ  
んか?」。誰かが「大勢の前で目標  
を言うのは、恥ずかしくて無理だ  
よ」「低い目標を言われたらこちら  
もショックですし……」と返す。し  
ばしの沈黙の後、「でも、出来たら  
いいですね」。皆同じ気持ちだった。

翌朝、全校生徒の前に立った山本  
先生が切り出した。「遅刻回数を目  
標値、きみたちが決めませんか?」。

驚いて山本先生を見る教師たち。だ  
が、視線はすぐに生徒に注がれる。  
山本先生が続ける。「誰か提案して  
ください」。少しの静寂の後、3  
年生の男子生徒が元気に挙手。堂々  
と目標値を提案する。教師たちが想  
定していたものよりもずっと高いレ  
ベルの目標だ。歓声をあげる生徒。  
「よし、頑張ろう!」と教師たちが  
満面の笑顔で拍手し、会は終了した。

教師の信頼に背を押され、生徒た  
ちは想像していたよりもずっと足早  
に、自立への道を歩いている。

学生が伸びる学び方

大学選択

新たな視点



## 今号の視点

# 大学での学びへの意欲とスキルを 育成する初年次教育〈東日本編〉

専門教育を学ぶための基礎となる「初年次教育」は、多くの大学が取り入れるようになり、一般的になりつつある。今号では、より意欲的にカリキュラムを工夫し、学生のスキル養成や専門教育への土台づくりを行う大学の中から、東日本にある2校を紹介する。

## 課題発見・解決が出来る 土台を初年次につくる

横浜市立大  
「共通教養」

### ◎課題意識と狙い

横浜市立大は、国際総合科学部（\*1）と医学部の2学部からなる公立大だ。同大では2年次から専門分野の教育が始まる（\*2）ため、1年次（初年次）の教養教育は、専門分野での学びの土台となる「大学での学び方」を身に付ける場として位置付けられている。

共通教養長の小屋良祐教授は、

「かつての教養科目は、『広く、浅く、満遍なく知識を学ぶ』傾向が強くなりました。しかし、本来、初年次教育は、専門分野での学びを深めるための基礎を身に付けることを目的としています。そこで、本学の考える教養とは『課題を発見し、身に付けた知識を使って問題解決をする力』であることを学内で共通理解を図っています。これは、どの専門分野を学ぶ際にも必要な力であり、また、社会で求められている力だと捉えています」と語る。

専門分野での学びを深めるに当たり、あらかじめ「課題発見・課

題解決」の技法と、主体的に学ぶ姿勢を身に付ける。全ての学生に必要なこの学びを、同大では国際総合科学部と医学部の枠を超えて1年生全員が履修する「共通教養」というカリキュラムにした。

### ◎取り組み内容

「共通教養」は、「問題提起」「技法の修得」「専門との連携」の3つの科目群で構成されている（図1）。「問題提起」は課題発見の視点を学ぶ科目群で、テーマに対して学問横断的にアプローチする授業が並ぶ。「技法の修得」は、問題を解決するための手法を身に付ける科目

群で、語学や情報技術などの科目が含まれる。「専門との連携」は、2年次以降の専門分野の基礎を学ぶための科目群だ。

この中の「技法の修得」の科目群に、「共通教養」の柱ともいえる必修科目「教養ゼミ」（前期）と「基礎ゼミ」（後期）がある。

「教養ゼミ」では、1年生全員を学部や入試方式が偏らないように1クラス約30人の30クラスに編成する。担当教員は1クラス2人で、1回の授業は90分×2コマの180分。担当教員によって進め方は多少異なるが、グループワー

\*1 国際総合科学部は、国際教養学系・国際都市学系・経営科学系・理学系から構成  
\*2 ただし、医学部は一部1年次から

図1 横浜市立大「共通教養」の3つの科目群

	科目	内容
問題提起	総合講義	課題発見を目的に、テーマに対して学問横断的にアプローチする科目群。「国際関係論」「横浜と産業」「医療と社会」などがある
	多文化交流ゼミ	英語で考えを表現することを学ぶゼミ (Practical English 合格者が対象)
	実践科目	キャリア形成実習や健康スポーツ実習など、教室外の活動を通して学ぶ
技法の修得	ゼミ	教養ゼミ*、基礎ゼミ*
	語学(英語および英語以外の外国語)	大学における知的活動を英語によって行える程度のコミュニケーション能力を身に付けることを目的にした「Practical English」* (国際総合科学部では TOEFL-ITP500 点相当以上が3年次進級の必須要件) などがある
	情報コミュニケーション科目	情報処理の知識と技術を学ぶ。「情報コミュニケーション入門」*「プログラミング基礎」「データ分析基礎」などがある
専門との連携	基礎科学講義	専門教養・専門教育の基礎となる入門的科目(「政治学入門」「心理学入門」「微分と積分」「生命の機能」など)、学問分野によらない課題探究科目などがある

\*必修科目

\*学校資料を基に編集部で作成

ク、個人の研究発表、レポートなど、学生が主体的に参加する形式が中心だ。これらの活動を通して、自ら考える力、すなわち課題発見・解決と知的生産の基礎的な技法の修得を目指す。

「教養ゼミ」を担当する平松尚子<sup>なほこ</sup>准教授は授業の流れについて、「私のクラスでは、5〜6人に分かれてグループワークを行います。メンバーそれぞれが関心を持つテーマを

出し合い議論した上で、テーマを1つに絞り、グループで研究を進め、発表をします。最初のグループ発表は、あえて学生の思うようにさせて、振り返りを丁寧に行うようにしています。続いて、図書館での資料の探し方、レポート作成の手法、出典を示す重要性など、学ぶためのスキルを修得した後、8週にわたって個人発表を行い、発表内容を基に6000〜8000字のレポートを作成します」と語る。

個人発表は学生個々の関心に基づきテーマ研究を進め、発表時間は1人当たり45分。25分程度の発表後、他の学生からの質問や、教員による講評などを受ける。前半のグループワークでの反省や授業で学んだスキルを踏まえた準備が必要だ。

「教員、友人、資料など、あらゆるリソースを利用しながら自分の考えを深める経験を、この授業を通して積んでほしいのです」(平松准教授)

国際総合科学部人間科学コース3年生の木村薫<sup>かほる</sup>さんは、「先生からの一方的な講義形式ではなく、自分たちで調べて発表する形式の授業で、やりがいがありました」と振り返る。

後期に開講される「基礎ゼミ」は、教員がそれぞれの専門分野を入門的に教えるゼミだ。

「『基礎ゼミ』は、実際の研究に触れることで学生の学問への興味をかきたてることを目的としています。教員が自分の専門分野に則した内容を教え、専門のゼミに入る前に『研究する』ことの一端を感じてもらおう授業です」(小屋教授)

◎成果と課題

「共通教養」の成果について、小屋教授は「従来は進級後の専門ゼミでこうした学び方を教えていましたが、1年次で身に付けて進級するため、専門教育の授業の質が高まっているのではないかと考えています」と語る。平松准教授は、「問いを認識し、信頼できる資料を集め、批判的に分析するという、研究の面白さを学生が知ることにもつながっているようです」と話す。

課題は、教員間の手法の平準化と

いった内容面での改善や、学生に対して「共通教養」の意義をより深く理解させるための伝え方の工夫などだ。「共通教養」を始めて以降、毎年改良を加えてきたが、引き続き工夫改善が検討されている。

### 全学部の学生の「大学での学びの基礎」を涵養する

武蔵野大  
武蔵野BASIS

#### ◎課題意識と狙い

8つの学部を擁する武蔵野大では、文理を問わず、全ての1年生が共に学び、「武蔵野大の学生」としてのアイデンティティと、大学で学ぶ力の形成を目的に、全学共通基礎課程として「武蔵野BASIS」という独自のカリキュラムを組む。教養教育部の部長を務める久富健<sup>ひこみ</sup>教授は、次のように説明する。

「本学では2000年頃からキャリア教育の改善を重ねてきました。この改善を通じて出てきた『4年間を通して学生をどう育てるか』という課題意識を基に、キャリア教育だけでなく大学教育自体を改善しようと、10年度から『武蔵野BASIS

「S」をスタートさせました。大学の教育の課題である教養教育と専門教育の隔たりを解消し、卒業後にも生かせる力を確実に涵養したいという意図を込めたカリキュラムです。学生の関心に任せた従来の教養教育ではなく、1年生で身に付けるべき力をしっかりと修得できるようなカリキュラムとしています」

◎ 取り組み内容

「武蔵野BASIS」の科目群は、建学の精神を基盤とした倫理観や健康体育を学ぶ「心とからだ」、英語と初修外国語を学ぶ「外国語」、コンピュータ関連科目、日本語リテラシー、社会に出てからも必要となる基礎学力を学ぶ「学問を学ぶための基礎」、教養とアカデミックスキルを身に付ける「自己理解・他者理解」で構成される(図2)。

最も特徴的な科目は、「自己理解・他者理解」に位置付けられている「基礎セルフディベロップメント」(通年科目・8単位)だ。1年生全員を1クラス約65人の28クラスに編成し、哲学、現代学、数理学、世界文学、社会学、地球学、歴史学の7分野を学ぶ。各分野を専門とする教員が交

替で3週ずつ担当し、1年間で「知の7つのインパクトを与える」というものだ。1回の授業は2コマ連続で行う。1コマ目は座学の講義、続く2コマ目は1コマ目で学んだ内容を基にグループワークなどに取り組み双方向型の授業となり、大学院生のTA(\*3)もサポートに入る。

「例えば、哲学の授業では、デカルトやニーチェの作品を読み、学生に議論させます。『なぜ理系学部に進学したのに文系の内容を学ぶのか』という疑問を持つ学生もいますが、全ての学生に本当の意味での教養に出合っしてほしい、知的刺激を受けてほしいという思いから、こうした授業をしています」(久富教授)

知識の伝授だけでなく、グループワークで「考え、議論し、伝える」訓練を行うことも重視する。コミュニケーション力、チームワーク形成力を養った学生たちの1年間の授業の集大成が、年度末の「成果発表」だ。7分野の中から自由に研究テーマを設定し、プレゼンテーション用ソフトを用いて発表を行う。

◎ 成果と課題

「基礎セルフディベロップメン

ト」の成果について、久富教授は次のように話す。

「他学部の学生とさまざまなテーマでグループ学習をしながら1年間学ぶことで、仲間ができ、学生としてのアイデンティティーも育まれていきます。学びの基礎も身に付いていくため、2年次以降も、学生は学問に熱心に取り組むようになり、ゼミでは議論やプレゼンテーションが円滑にされるようになりました」

政治経済学部政治経済学科3年の保谷麻衣さんは、「学生同士で意見を言い合う環境が新鮮でした。他学部の人と話す機会を通じて考え方の違いを知り、互いにアドバイスし合ったことで多くの気づきがありました。これが学習への積極性につながっています」と振り返る。3年生になり、発言の機会のある授業が増えた今、グループで学びを深める経験が役立っているという。

「武蔵野BASIS」の科目はほとんどが必修で、進級基準科目(\*4)も設定されているためか、学生の出席率も高い。このカリキュラム

図2 武蔵野大「武蔵野BASIS」の科目

分野	科目と内容
心とからだ	建学/建学の精神を基盤とした倫理観や慈悲の心を学ぶ 健康体育/身体を動かす体育と身体行動についての学びの理解と実践
外国語	外国語*/英語 外国語*/中国語、韓国語、フランス語、スペイン語、ドイツ語
学問を学ぶための基礎	コンピュータ*/調査・研究などでコンピュータを活用する力の育成 日本語リテラシー*/論理性・表現力の養成 武蔵野BASIS基礎/社会に出て必要となる社会科学と自然科学の一般的な基礎力を育む
自己理解・他者理解	基礎セルフディベロップメント*/「哲学」「数理学」などの7つの分野で基礎教養を学ぶ キャリア開発・自己の探求/自己や他者を深く理解する力の育成 キャリア開発・キャリアデザイン/人生を豊かに生きていく力の育成

「武蔵野BASIS」は4分野10科目で構成される。\*の進級基準科目は単単位を取得しないと2年生に進級できない。1年生は上記10科目に加え、各学部の科目を履修する \*学校資料を基に編集部で作成

を通して友だちや居場所が出来ることもあり、大学への帰属意識が高まっているという。

12年度で3年目を迎える「武蔵野BASIS」。普段からFD活動を活発にして教育内容のブラッシュアップを行っていることに加え、13年度には学生の成長度合いや満足度などのデータを確認し、改善を加えていく予定だ。キャリア教育をはじめ、教育内容の大きな変更を試みた科目もあり、発展途上のカリキュラムといえる。

\*3 Teaching Assistant の略。授業の運営の支援や補佐をする学生のこと

\*4 単位を取得しないと2年生に進級できない科目

専門分野を学ぶ手法と  
姿勢を学んだ



横浜市立大国際総合科学部  
人間科学コース3年  
藤田良也  
(神奈川県立瀬谷高校卒業)

高校時代から世界の文化や人に興味があり、大学では言語や異文化を学び、英語教師になることを目標に入学しました。「教養ゼミ」のグループワークでは、「海外留学」をテーマにしました。私は語学や文化に関心がありましたが、医学部の学生は医学留学について調べてくるなど、異なる視点での意見による刺激を受けました。グループワークでの発表で、担当の小屋先生から、発表資料の細かい誤りや参考資料の扱い方について厳しく指導され、悔しい思いをしました。個人発表では、グループワークで指摘された点に留意して臨みました。大学での学び方や図書館の使い方、自分で調べる主体的な勉強法など、専門分野を学ぶ上で大切なことを学んだのだと思います。これがなければ、2年生になって本格的な専門分野での学びに対応できなかったでしょう。「専門ゼミ」では、文化を対象に人間科学や心理学と教育のつながりを学ぼうと思い、社会学の滝田祥子先生のゼミを選択。教育のさまざまな形について学びを深めたいと考えています。

物事を関連付けて考える  
姿勢が身に付いた



武蔵野文学部  
日本語日本文学科3年  
後藤翔美  
(東京都立墨田川高校卒業)

高校生の頃は社会学に興味がありましたが、他学部聴講も含め、いろいろな学べそうな武蔵野大に進学しました。「基礎セルフディベロップメント」では、難しいテーマでも先生が分かりやすく解説してくれました。例えば、哲学では「あなたはデカルト派とパスカル派のどっち？」など、普段は意識しないようなテーマでも、興味を持って議論できました。話を聞くだけでなく議論することで、メンバーの考え方の違いや視点の違いも共有でき、興味を深めることが出来ました。短時間で深い議論をする練習が出来たと思います。こうした学びは、今、物事を関連付けて考える土台となっています。日本語教育だからといって、日本語だけを教えるのではなく、歴史や社会などの背景も含めて伝える必要があるという視点を持てたのも、この授業があったからです。討論のグループは授業ごとに変わるので、今でも仲良くしている人もいます。たぐさんの人と知り合いになれたのも収穫でした。

進路指導に生かす

初年次教育での

必修科目の比率に注目

今回は、「大学4年間を通してどのような力を付けるべきか」「専門性を深めるためには初年次に何をすべきか」という課題意識を持ち、カリキュラム改善に意欲的に取り組む大学を取り上げた。この2校では、初年次教育における必修科目の比率が高い。学生の科目選択の裁量は狭まるものの、カリキュラム自体が「大学で何を身に付けるべきか」という問いに答えているともいえる。

学部での専門教育の内容に比べ、注目されることが少ない初年次教育だが、「4年間の教育」に対する大学の姿勢が判断できる部分だといえる。大学選びの際の1つの重要な指標になるだろう。

取材・編集協力：山内太地

特徴的な初年次教育実施大学 東日本編

初年次教育に少人数のゼミ形式を取り入れる大学・学部を紹介

●一橋大商学部  
導入ゼミナール

4年間を通してのゼミナール教育を重視。1年次の「導入ゼミ」では、大学が必要となる「読む・書く・考える」という基礎的なリテラシーを育む。2年次の「前期ゼミ」では、英語の文献から専門知識を学ぶために必要な力を養う。

●首都大東京  
基礎ゼミナール

1年生の必修科目。定員は24人。テーマ別に約70クラスが開講される。授業は調査レポート作成→発表→討論の流れで、課題解決に必要なスキルを体験的に習得する。

●聖心女子大  
基礎課程

1年次は「基礎課程」とし、全員が少人数ゼミに所属。アカデミックアドバイザーを兼ねる担任教員の指導を受ける。「1年次センター」というサポート室があり、相談も可能。2年次進級時に学科専攻を選ぶ。

●明星大  
自立と体験1・2

「自立と体験1」は50人の教員が約30人×67クラスを担当。対話を通じて、各自の理想や目的を見つめていく。「自立と体験2」は、フィールドワークなどの実践型で、自身の興味や可能性を探る。

【試行錯誤】を支援できる教師の存在が重要

8月号の特集で、「試行錯誤の中で主体性を育む」という考えに感銘を受けた。今は、子どもも大人も失敗を嫌がり、失敗を許さない傾向にあると思う。そうした中、予習を重視する指導や負荷を与える指導は現実的な手法であり、参考になった。ただ「試行錯誤」を補完する機能を学校は持つべきだろう。例えば、担任との面談や、教育相談・特別支援教育機能の充実などだ。また、生徒の主体性をうまく育てるには、コミュニケーション能力の育成も重要だと思う。傾聴から自他を尊重し、認め合い、信頼関係を構築できる力の育成なくして、「試行錯誤」を繰り返すサイクルは生まれられないのではないか。いろいろなことに挑戦できる学校であること、それをサポートできる教師の存在が重要だと感じている。 [徳島県・匿名希望]

小中高連携と課題研究の取り組みに気付きを得た

8月号「指導変革の軌跡」の長野県飯山北高校の記事を読み、小中高連携を多岐に渡って行っていることに驚いた。連携が進むのは学校数が多い都市部だという先入観があったが、それを覆されたからだ。うまくいく背景には、近年失われつつある地域を大切にしたいという姿勢と地域の子どもは地域で育てたいという思いがあるのだろう。授業の負担との引き換えに、得難い情報や感触が待っているのだと思った。形式だけにとどまらず、つまり調査で現状分析を行うことも素晴らしい

読者のページ

VIEW'S SQUARE

Volume 4

教育最前線からのホットな話題を紹介します

いアイデアだと感じた。また、茨城県・私立清真学園高校・中学校の「ゼミ活動」は、自身の経験と重ねて読むことが出来た。課題研究は、よい活動にしようとするほど教師の負担が大きくなり、それに反対の声が上がることもしばしばだ。しかし、同校は方向性を定め、ぶれることなく進み、確たる成果を上げた。進学校の課題研究も、工夫次第でこのように生徒の関心と進路選択という実益を兼ねた取り組みにつながるのだと気付かされた。 [三重県立四日市中央工業高校・井上和也]

英語教育改革に必要な心構えとノウハウの深化

新学習指導要領への移行に際し、英語教育の改革が求められている。6月号「新課程のファースト・ステップ」で英語教育が取り上げられていたが、その中に「コミュニケーション重視の授業を実践している高校の多くは、結果として大学入試の実績を伸ばしているようだ」という記述があった。このような言葉の「理解」を間違えて捉えると、そして授業の進め方を十分に練らないと、結局、単語力や文法力、記述力が不十分な生徒を増やし、大学入試に耐えられないことになりかねない。教師の心構えと共に、ノウハウの深化が大切だと考える。 [京都府・匿名希望]

教師川柳

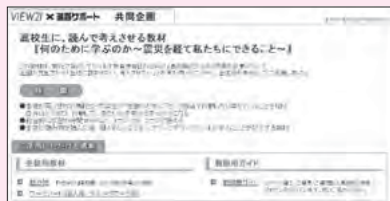
実りある秋になれよと語りかけ

長野県・一徹

高校生に読んで考えさせる教材（無料）

「何のために学ぶのか～震災を経て私たちにできること～」をご用意いたしました

「VIEW21」高校版2012年6月号の特集「他者のために学ぶ」をお読みいただいた先生方から「授業で生徒に読ませ、考えさせたい」との声を多くいただきました。そこで、記事にワークシートなどを加えた、生徒用教材をご用意しました。ぜひ、「総合的な学習の時間」やLHRなどでご活用ください。右記ウェブサイト「ベネッセハイスクールオンライン」から無料でダウンロードしていただけます。



\*内容や画面デザインは変更になる場合があります  
<http://www.fine.ne.jp>

\*Benesse High School Online は高校の先生専用の情報サイトです。ご利用には学校別のユーザー名・ログインコードが必要です

編集後記

◎今回の特集の取材で、約20年ぶりに高校の授業を体験しました。ワクワク、ドキドキしながら見学していて思ったのは、毎日授業が受けられる高校生がうらやましいということです。社会人になると、日々の仕事に追われ、学びたくても学ぶ時間をなかなかつくれません。「勉強が本分」である高校時代は貴重な時間なのだ、今になって痛感しています。その時間を、生徒さんたちに主体的に過ごしてほしい——先生方も同じであろうこの思いをかなえるヒントが、今号の特集にあります。先生方の今後のご指導の参考にさせていただきます。 (柏木)

ベネッセ教育研究開発センター高等教育研究所 ホームページ開設のお知らせ

ベネッセ教育研究開発センター高等教育研究所のホームページを開設しました。高等教育に関連した独自の調査データなどを公開しながら、これからの社会で活躍できる人材を育成するための大学教育改革を支援します。  
<http://benesse.jp/berd/koutou/index.html>

VIEW21 2012 December 12月 Volume 5 次号は 12月3日発行(予定) 「VIEW21」高校版は 年6回の発行です

VIEW21 10月号 Vol.4

2012年10月5日発行

発行人 新井健一  
 編集人 原 茂  
 発行所 (株)ベネッセコーポレーション Benesse教育研究開発センター  
 印刷製本 凸版印刷(株)  
 編集協力 (有)ペンダコ  
 執筆協力 中丸満、二宮良太、横堀夏代  
 撮影協力 荒川 潤、川上一生、南弘幸、ヤマグチイッキ  
 イラスト協力 山本重也  
 VIEW21編集部  
 〒206-8686 東京都多摩市落合1-34  
 電話 042-311-3391

©Benesse Corporation 2012